

7 動物

7.1 調査

1) 調査内容

(1) 調査すべき情報

調査すべき情報を以下に示す。

- ・ほ乳類、鳥類、両生類、は虫類、魚類、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況
- ・重要な種及び注目すべき生息地の分布、生息の状況、生息環境の状況

(2) 調査方法

① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査では、主に動物の重要な種（生息の状況）及び注目すべき生息地（生息環境の状況）について整理した。

重要な種については、「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成 28 年改定、福岡市）において示されている福岡市内の貴重・希少生物等のリスト、自然環境情報地図（貴重・希少生物等確認地図）より、対象事業実施区域周辺における生息の状況等を整理した。

注目すべき生息地については、「環境アセスメントデータベース EADAS」（平成 29 年改訂、環境省）において整理されている全国環境情報の項目のうち、動物の生息の状況等自然的状況及び環境の保全を目的とする法令などにより指定された地域等の社会的状況を整理した。

② 現地調査

調査方法は、対象事業実施区域及びその周辺において、ほ乳類、鳥類（一般鳥類、猛禽類）、両生類、は虫類、魚類、昆虫類及び底生動物について、現地で観察や採集を行うことにより情報の収集並びに当該情報の整理及び解析を行った。

各調査の調査方法は表 9.7.1-1 に示すとおりである。

表 9.7.1-1 (1/3) 現地調査方法

項目	調査方法	調査方法の解説
ほ乳類	 任意確認法・フィールドサイン法	調査範囲内を任意に踏査し、フィールドサイン（足跡、糞、食痕等）の確認を行い、確認位置や利用環境を記録した。個体が確認された場合も同様に記録した。夜間にはバットデテクターを用いてコウモリ類調査を実施した。
	 シャーマントラップ法	調査範囲内にネズミ類等を対象としたシャーマントラップを設置し、捕獲した種の確認、記録を行った。1 地点あたり 10 個を 3 地点（2 晩）設置した。
	 無人撮影法	調査範囲内に夜行性ほ乳類を対象とした自動撮影カメラを設置し、種名等の確認を行った。
鳥類 (一般鳥類)	 定点観察法	調査範囲内に設定した地点において双眼鏡又は望遠鏡を用いて周辺に出現した個体の種名、個体数、利用環境等を記録した。調査時間帯は日の出後から午前中までとした。
	 ラインセンサス法	調査範囲内に設定したルート上を歩きながら、双眼鏡を用いて確認された鳥類の種名、個体数、利用環境等を記録した。調査時間帯は日の出後から午前中までとした。
	 任意観察法	定点観察法及びラインセンサス法のルートや調査地点以外を中心に任意で踏査し、重要種を中心に確認された鳥類の種名、個体数、利用環境等を記録した。フクロウ類等の夜行性の鳥類を対象に夜間調査も実施した。
鳥類 (猛禽類)	 定点観察法	調査範囲内に設定した複数地点において双眼鏡又は望遠鏡を用いて周辺に出現したトビ以外の猛禽類の種名、個体数、性齢、飛翔軌跡、行動詳細等を記録した。地点間で無線機を用いて観察対象個体を可能な限り追跡するとともに、望遠レンズによる撮影を行い、個体識別に務めた。調査は 3 日間連続で行い、8 時～16 時の 8 時間を基本とした。

表 9.7.1-1 (2/3) 現地調査方法

項目	調査方法	調査方法の解説
両生類	 任意観察法	調査範囲内を任意に踏査し、個体や卵塊、死体等の確認に努めた。個体や鳴声を確認した場合には、種名、個体数、利用環境等を記録した。
は虫類	 任意観察法	調査範囲内を任意に踏査し、個体や卵塊、死体等の確認に努めた。個体等を確認した場合には、種名、個体数、利用環境等を記録した。
	 捕獲法	カゴ網を用いてカメ類の捕獲・確認に努めた。個体を確認した場合には、種名や個体数を記録した。
魚類	 任意確認法	投網、タモ網、刺網、セルビン、もんどり、カニかごを用いて捕獲し、また目視観察による種類の記録を行った。

表 9.7.1-1 (3/3) 現地調査方法

項目	調査方法	調査方法の解説
昆虫類	 任意確認法	調査範囲内を任意に踏査し、見つけ採り法、ビーティング法、スウィーピング法等により昆虫類を採取した。
	 ベイトトラップ法	調査範囲内に設定した地点において、乳酸菌飲料やビールを混合した誘因餌を入れたプラスチックカップの口が地表面と同じ高さになるよう埋設し、カップ内に落下した個体を採集した。1地点あたり10個（1晩）設置した。
	 ライトトラップ法	夜行性の昆虫類を対象として、光源の下に誘引された昆虫類が箱の中に落ち込むように、大型漏斗とバケツからなる捕虫器を設置して採集した。1地点あたり1個（1晩）設置した。
底生動物	 任意確認法	タモ網を用いて底生動物を採集し、種名及び確認状況等を記録した。
	 コドラート法	サーバネット及びエクマンバージ採泥器を用いて底生動物を定量的に採集し、種名や個体数等を記録した。

(3) 調査地域及び調査地点等

調査地域、調査地点及び調査ルートは図 9.7.1-1、図 9.7.1-2 に示すとおりである。

調査地域は、事業実施により改変が想定される区域（以下「改変区域」という。）及び想定される環境影響の範囲、並びに動物の行動圏及び生息環境の連続性を十分考慮した上で、対象事業実施区域及びその周辺 として。現地調査地点及び踏査ルートは、動物の生息の特性を踏まえ、調査地域における重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を予測・評価するために必要な情報を適切かつ効果的に把握できる地点又は経路とした。

ほ乳類、鳥類（一般鳥類）、両生類、は虫類、昆虫類については、個体を確認した際に表 9.7.1-2 及び図 9.7.1-3 に示す生息環境（ほ乳類、両生類、は虫類、昆虫類：環境 1～環境 9、鳥類のみ環境 10、環境 11、環境 12 の 3 区分を含めた 12 区分とした。）に分類して記録を行った。

行動圏の広い猛禽類に対しては、

当該調査範囲付近において調査地点を 5 定点設置した。現地調査時には、対象事業実施区域を含む 6 定点のうち、周辺樹木の状況等を踏まえた見通しのよさや猛禽類の出現状況等を踏まえて 3 定点を使用した（表 9.7.1-3 及び図 9.7.1-2 参照）。

魚類及び底生動物に対しては、

表 9.7.1-2 ほ乳類、鳥類（一般鳥類）、両生類、は虫類、昆虫類における環境区分

	環境1	環境2	環境3	環境4	環境5	環境6	環境7	環境8	環境9	環境10	環境11	環境12
	落葉二次林	植林	常緑二次林	造成林	草地	水辺	緑の多い施設等	緑のある団地等	緑の少ない施設等			
ほ乳類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—
鳥類（一般鳥類）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
両生類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—
は虫類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—
昆虫類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

調査地点

ほ乳類

- : シャーマントラップ
(M-1～3)
- : 自動撮影カメラ (M-1～5)

鳥類

- : 定点観察法 (B-1)
- : ラインセンサス法
(B-2, B-3)

昆虫類

- : ライトトラップ
ベイトトラップ
(T-1～5)

魚類・底生動物

- :
- :
- :



S = 1:7,500



図 9.7.1-1 動物の現地調査範囲と
調査地点及びルート

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

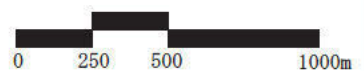
凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

 : 猛禽類定点位置(R-1～6)



S = 1:25,000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-2 猛禽類の現地調査範囲と
調査地点

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

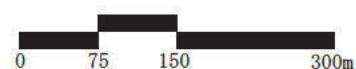
-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

環境区分

- | | |
|--|---|
|  1 : 落葉二次林(環境1) |  7 : 緑の多い施設等(環境7) |
|  2 : 植林(環境2) |  8 : 緑のある団地等(環境8) |
|  3 : 常緑二次林(環境3) |  9 : 緑の少ない施設等(環境9) |
|  4 : 造成林(環境4) | |
|  5 : 草地(環境5) | |
|  6 : 水辺(環境6) | |



S = 1:7,500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-3 動物の現地調査範囲と
環境区分

(4) 調査期間等

文献その他の資料調査については、令和5年12月とした。

現地調査についての調査期間等は表9.7.1-3に示すとおりであり、動物の生息の特性を踏まえ、調査地域における重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を予測・評価するために必要な情報を適切かつ効果的に把握できる期間、時期とした。

猛禽類調査で使用した調査定点は表9.7.1-4に示すとおりである。

表 9.7.1-3 動物の現地調査期間等

項目	調査方法	範囲・地点数等	調査時期
ほ乳類	任意観察法 フィールドサイン法	調査範囲内	秋季：令和4年10月24日～25日 冬季：令和5年2月2日～3日 春季：令和5年4月21日～23日 夏季：令和5年7月19日～21日
	シャーマントラップ法	3地点（10個/地点、1晩）	
	無人撮影法	5地点 （1個/地点、1か月程度）	
鳥類 （一般鳥類）	定点観察法	1地点	秋季：令和4年10月7日 冬季：令和5年2月2日 春季：令和5年4月21日 初夏：令和5年6月28日～30日 夏季：令和5年8月4日
	ラインセンサス法	2ルート	
	任意観察法	調査範囲内	
鳥類 （猛禽類）	定点観察法	6地点のうち3地点を使用 （調査地点の詳細については 表9.7.1-4参照。）	令和4年4月13日～15日 令和4年5月23日～25日 令和4年6月20日～22日 令和4年7月20日～22日 令和4年8月9日～11日 令和5年2月15日～17日 令和5年3月15日～17日 令和5年4月18日～20日 令和5年5月23日～25日 令和5年6月27日～29日
両生類	任意観察法	調査範囲内	秋季：令和4年10月24日～26日 早春季：令和5年3月1日 夏季：令和5年7月19日～21日
は虫類	任意観察法	調査範囲内	
	捕獲法	調査範囲内	
魚類	任意確認法	2地点	秋季：令和4年10月25日～26日 春季：令和5年4月24日～25日
昆虫類	任意確認法	調査範囲内	秋季：令和4年10月24日～26日 春季：令和5年4月23日～24日 夏季：令和5年7月3日～6日
	ベイトトラップ法	5地点 （10個/地点、1晩）	
	ライトトラップ法	5地点 （ボックス型1個/地点、1晩）	
底生動物	任意確認法	2地点	早春季：令和5年3月1日 夏季：令和5年7月26日～27日
	コドラート法		

注：魚類については、

底生動物については、

表 9.7.1-4 猛禽類調査で使用した調査定点

調査日			実施定点						合計
			R-1	R-2	R-3	R-4	R-5	R-6	
令和4年	第1回	4月13日		●		●	●		3
		4月14日		●		●	●		3
		4月15日		●		●	●		3
	第2回	5月23日	●	●	●				3
		5月24日	●	●	●				3
		5月25日	●	●	●				3
	第3回	6月20日	●	●	●				3
		6月21日	●	●	●				3
		6月22日	●	●	●				3
	第4回	7月20日	●	●	●				3
		7月21日	●	●	●				3
		7月22日	●	●	●				3
	第5回	8月9日	●	●	●				3
		8月10日	●	●	●				3
		8月11日	●	●	●				3
令和5年	第6回	2月15日	●	●	●				3
		2月16日	●	●	●				3
		2月17日	●	●	●				3
	第7回	3月15日	●	●	●				3
		3月16日	●	●	●				3
		3月17日	●	●	●				3
	第8回	4月18日	●	●	●				3
		4月19日	●	●	●				3
		4月20日	●	●		●			3
	第9回	5月23日	●	●	●				3
		5月24日	●	●	○	○			4
		5月25日	●	●		●			3
	第10回	6月27日	●	●	○			○	4
		6月28日	●	●				●	3
		6月29日	●	●			○	○	4
合計			27	30	23	6	4	3	30

注：●：終日、○：途中移動

(5) 専門家による技術的助言

調査にあたっては表 9.7.1-5 に示す専門家の助言を受けた。

表 9.7.1-5 調査等に関する専門家の助言

専門家	所属機関	専門分野	助言内容
専門家 B	公益社団 法人	動物 (鳥類)	・猛禽類は、経年的な繁殖状況（毎年繁殖するか、同場所で繁殖するか等）で不明な点が多い。猛禽類の調査は、令和 4 年の結果を踏まえ、もう 1 年は実施した方がよい。但し、繁殖の可能性が否定できないハヤブサの繁殖状況の確認を重視した計画でよい。 ・猛禽類の令和 5 年の調査手法は、調査期間：（令和 5 年 2 月～6 月）、調査頻度：（各月 1 回 3 日連続、8:00～16:00）、調査地点数：（3 定点）、調査エリア： 調査方法（定点観察を基本）とするのでよい。 ・ハヤブサは、繁殖期においても、一般には、工事作業員の存在や工事騒音の影響を受けにくい種である。しかしながら、環境影響評価のためには、調査エリア内における繁殖の有無の実態を把握し、本事業の工事内容を踏まえた影響の予測・評価、及び環境保全措置の必要性を検討すべきである。 ・一般鳥類調査の地点等は、定点観察法が 1 定点 、ラインセンサス法が 2 ルート でよい。 ・夜行性鳥類は、事業実施区域及びその周辺では、アオバズク（県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類）とフクロウ（専門家の指摘（身近な減少種））が繁殖する可能性がある。両種を対象とした調査としては、繁殖に適した大木の有無の確認を行い、その結果を踏まえて、必要に応じ、夜間の繁殖状況調査を検討すればよい。

2) 調査結果

(1) 文献その他の資料調査

① 動物の重要な種

「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成 28 年改定、福岡市）において整理されている福岡市内の貴重・希少生物等のリスト、自然環境情報地図（貴重・希少生物等確認地図）より対象事業実施区域周辺における貴重・希少動物の生息状況を以下に示す。

ア ほ乳類

「自然環境情報地図【西区①】貴重・希少生物等確認地図 哺乳類・爬虫類・両生類」では、東西約 1.1km、南北約 0.9km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

ほ乳類については、対象事業実施区域を含むメッシュ及びその周辺の 8 メッシュに貴重・希少な種の生息情報はなかった。

イ 鳥類（一般鳥類及び猛禽類）

「自然環境情報地図【西区②】貴重・希少生物等確認地図 鳥類」では、東西約 2.2km、南北約 1.8km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

対象事業実施区域を含むメッシュ及びその北側、北東側、東側のメッシュには、表 9.7.1-6 に示すとおり、26 種の貴重・希少な種の生息が報告されている。

表 9.7.1-6 貴重・希少な動物種の状況（一般鳥類及び猛禽類）

種名	カテゴリー			出典																
	福岡県RDB	環境省RL	その他指定状況	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
アオバズク	絶滅危惧Ⅱ類			○		○		○				○			○	○		○	○	○
アオバト			専門家の指摘*1			○	○	○			○		○		○	○	○		○	○
アマサギ	準絶滅危惧			○				○	○			○	○		○	○	○		○	○
イカルチドリ	絶滅危惧Ⅱ類			○		○		○				○			○	○	○		○	○
オオヨシキリ	準絶滅危惧			○				○				○	○		○	○	○	○	○	○
オシドリ	準絶滅危惧	情報不足 (DD)		○		○		○	○			○			○	○	○	○	○	○
カンムリカイツブリ	準絶滅危惧			○	○	○		○		○		○			○	○	○		○	○
キビタキ			専門家の指摘*2			○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○
クロサギ	準絶滅危惧			○				○				○			○	○	○		○	○
コアジサシ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	県指定希少野生動物種	○		○		○				○	○		○	○	○		○	○
コサメビタキ	情報不足						○	○				○			○	○	○	○	○	○
コシアカツバメ	準絶滅危惧						○	○				○	○		○	○	○	○	○	○
コルリ	絶滅危惧ⅠB類			○			○	○				○			○	○			○	○
サンコウチョウ	絶滅危惧Ⅱ類			○		○		○							○	○			○	○
センダイムシクイ	絶滅危惧Ⅱ類			○			○	○							○	○	○		○	○
チュウサギ	準絶滅危惧	準絶滅危惧 (NT)		○		○		○	○			○	○		○	○	○	○	○	○
ツリスガラ	準絶滅危惧					○		○				○			○	○	○	○	○	○
ノスリ	準絶滅危惧						○	○				○			○	○	○	○	○	○
ハイタカ		準絶滅危惧 (NT)				○	○	○				○			○	○	○	○	○	○
ハチクマ	準絶滅危惧	準絶滅危惧 (NT)		○		○	○	○				○			○	○	○	○	○	○
ハマシギ	準絶滅危惧	準絶滅危惧 (NT)		○				○		○		○	○		○	○	○		○	○
ヒクイナ	準絶滅危惧	準絶滅危惧 (NT)		○				○		○		○			○	○	○		○	
フクロウ			専門家の指摘*2			○	○	○				○	○		○	○			○	○
ミサゴ		準絶滅危惧 (NT)				○		○		○		○	○		○	○	○	○	○	○
ヤイロチョウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類 (EN)	国内希少野生動物種	○		○	○					○			○	○			○	○
ヤマドリ	絶滅危惧Ⅱ類			○		○	○	○							○	○			○	○

注：1) カテゴリー

福岡県RDB：福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2011 ―植物群落／植物／哺乳類／鳥類―（平成23年11月）

環境省RL：環境省レッドリスト2020（令和2年3月）

その他の指定状況：天然記念物・種の保存法等の指定状況、専門家の指摘、福岡県希少野生動物種の保護に関する条例

2) 専門家の指摘

*1 福岡市では確認されることが少なくなった種

*2 身近な減少種

3) 出典

①福岡県RDB：福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2011 ―植物群落／植物／哺乳類／鳥類―（平成23年11月）

②自然環境調査委託（今津干潟における貴重鳥類調査）（平成9年3月）

③福岡市環境配慮指針（平成9年3月）

④自然環境調査委託 脊降山地における貴重種動物の生息状況調査（平成10年3月）

⑤自然環境調査委託 市域における鳥類の生息状況等調査（平成11年3月）

⑥地域生態系等調査（東平尾・金隈地域）（平成13年3月）

⑦平成12年度鳥類生息状況解析基礎調査委託業務（平成13年3月）

⑧地域生態系等詳細調査（東平尾・金隈地域）（平成14年3月）

⑨市域生態系調査業務委託（平成14～15年度）

⑩平成15年度今津干潟保全対策調査委託（平成16年3月）

⑪環境手帳 宇美川と多々良川の合流部にすむ生き物（平成17年3月）

⑫平成17年度自然環境調査（鳥類）委託（平成18年3月）

⑬平成22年度自然環境調査（鳥類、昆虫類及び貴重植物）委託（平成23年3月）

⑭アイランドシティ環境モニタリング業務委託（平成5～27年度）

⑮九州大学統合移転事業環境監視調査 平成26年度 総合報告書（平成27年9月）

⑯平成27年度自然環境調査（鳥類）委託（平成28年3月）

⑰令和2年度自然環境調査（鳥類）委託（令和3年3月）

出典：「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成28年改定、福岡市）

ウ 両生類

「自然環境情報地図【西区①】貴重・希少生物等確認地図 哺乳類・爬虫類・両生類」では、東西約 1.1km、南北約 0.9km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

両生類については、対象事業実施区域を含むメッシュ及びその周辺の 8 メッシュに貴重・希少な種の生息情報はなかった。

エ は虫類

「自然環境情報地図【西区①】貴重・希少生物等確認地図 哺乳類・爬虫類・両生類」では、東西約 1.1km、南北約 0.9km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

は虫類については、対象事業実施区域の西側のメッシュにおいて、表 9.7.1-7 に示すとおりニホンイシガメ 1 種の貴重・希少な種の生息が報告されている。

表 9.7.1-7 貴重・希少な動物種の状況（は虫類）

種名	カテゴリー			出典							
	福岡県RDB	環境省RL	その他指定状況	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
ニホンイシガメ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧 (NT)		○		○	○	○	○	○	○

注：1) カテゴリー

福岡県RDB：福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014

—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）

環境省RL：環境省レッドリスト2020（令和2年3月）

その他の指定状況：天然記念物・種の保存法等の指定状況、専門家の指摘

福岡県希少野生動植物種の保護に関する条例

2) 出典

①福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014

—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）

②福岡市環境配慮指針（平成9年3月）

③自然環境調査委託 ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況等調査（平成13年3月）

④平成19年度自然環境調査（ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況）委託（平成20年3月）

⑤平成19年度自然環境調査（外来生物の生息状況調査）委託（平成20年3月）

⑥平成24年度自然環境調査（ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況）委託（平成25年3月）

⑦九州大学統合移転事業環境監視調査 平成26年度 総合報告書（平成27年9月）

⑧平成29年度自然環境調査（ほ乳類・は虫類・両生類の生息状況）委託（平成30年3月）

出典：「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成28年改定、福岡市）

オ 魚類

「自然環境情報地図【西区④】貴重・希少生物等確認地図 魚類・貝類・甲殻類その他」では、東西約 1.1km、南北約 0.9km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

魚類については、対象事業実施区域を含むメッシュの東側、南東側のメッシュにおいて表 9.7.1-8 に示すとおりメダカ（ミナミメダカ）1 種の生息が報告されている。

表 9.7.1-8 貴重・希少な動物種の状況（魚類）

種名	カテゴリー			出典											
	福岡県RDB	環境省RL	その他指定状況	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
メダカ（ミナミメダカ）	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類（VU）		○		○	○		○	○	○		○	○	○
				⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	
				○			○	○		○		○	○	○	

注：1) カテゴリー

福岡県RDB：福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014
—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）
環境省RL：環境省レッドリスト2020（令和2年3月）
その他の指定状況：天然記念物・種の保存法等の指定状況、専門家の指摘
福岡県希少野生動植物種の保護に関する条例

2) 出典

- ①福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014
—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）
- ②専門家からのヒアリング情報
- ③福岡市環境配慮指針（平成9年3月）
- ④自然環境調査（室見川における貴重種魚類の生息状況調査）（平成11年3月）
- ⑤平成11年度自然環境調査（ため池の貴重種生物の生息状況調査）（平成12年3月）
- ⑥自然環境調査（河川における水生生物の生息状況調査）（平成12年3月）
- ⑦自然環境調査（里地の細流等における貴重種魚類の生息状況調査）（平成13年3月）
- ⑧平成13年度自然環境調査（ため池の生態系調査）（平成14年3月）
- ⑨平成15年度今津干潟保全対策調査委託（平成16年3月）
- ⑩環境手帳 宇美川と多々良川の合流部にすむ生き物（平成17年3月）
- ⑪平成17年度自然環境調査（里地の貴重種魚類の生息状況調査）委託（平成18年3月）
- ⑫平成18年度自然環境調査（水生生物）委託（平成19年3月）
- ⑬平成19年度自然環境調査（外来生物の生息状況調査）委託（平成20年3月）
- ⑭平成19年度アイランドシティ環境モニタリング等調査委託（平成20年3月）
- ⑮平成19年度エコパークゾーン環境マップ作成業務委託（平成20年3月）
- ⑯平成22年度自然環境調査（里地の貴重種魚類の生息状況調査）委託（平成23年3月）
- ⑰平成23年度自然環境調査（水生生物）委託（平成24年3月）
- ⑱アイランドシティ環境モニタリング業務委託（平成5～26年度）
- ⑲九州大学統合移転事業環境監視調査 平成26年度 総合報告書（平成27年9月）
- ⑳平成26年度新西部水処理センター環境モニタリング調査業務委託（平成27年3月）
- ㉑平成27年度多々良川水系感潮域環境調査業務委託（平成28年3月）
- ㉒平成28年度自然環境調査（水生生物）委託（平成29年3月）
- ㉓令和3年度自然環境調査（水生生物）委託（令和4年3月）

出典：「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成28年改定、福岡市）

カ 昆虫類

「自然環境情報地図【西区③】貴重・希少生物等確認地図 昆虫類」では、東西約 1.1km、南北約 0.9km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

昆虫類については、対象事業実施区域を含むメッシュの西側、南西側のメッシュにおいてハルゼミ、北側のメッシュにベニイトトンボの 2 種の貴重・希少な種の生息が表 9.7.1-9 に示すとおり報告されている。

表 9.7.1-9 貴重・希少な動物種の状況（昆虫類）

種名	カテゴリー			出典																
	福岡県RDB	環境省RL	その他指定状況	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
ハルゼミ	準絶滅危惧					○									○				○	
ベニイトトンボ		準絶滅危惧 (NT)				○			○	○		○	○	○					○	

注：1) カテゴリー

福岡県RDB：福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014
—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）
環境省RL：環境省レッドリスト2020（令和2年3月）
その他の指定状況：天然記念物・種の保存法等の指定状況、専門家の指摘、福岡県希少野生動植物種の保護に関する条例

2) 出典

- ①福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014
—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）
- ②専門家からのヒアリング情報
- ③福岡市環境配慮指針（平成9年3月）
- ④平成9年度自然環境調査（福岡市域における昆虫の生息状況調査）（平成9年）
- ⑤平成11年度自然環境調査（ため池の貴重種生物の生息状況調査）（平成12年3月）
- ⑥平成13年度自然環境調査（ため池の生態系調査）（平成14年3月）
- ⑦市域生態系調査業務委託（平成14～15年度）
- ⑧平成14年度鉄軌道導入環境調査委託（平成15年3月）
- ⑨平成16年度自然環境調査（昆虫）委託（平成17年3月）
- ⑩平成19年度自然環境調査（外来生物の生息状況調査）委託（平成20年3月）
- ⑪平成21年度自然環境調査（昆虫類及び貴重植物）委託（平成22年3月）
- ⑫平成22年度自然環境調査（鳥類、昆虫類及び貴重植物）委託（平成23年3月）
- ⑬九州大学統合移転事業環境監視調査 平成26年度 総合報告書（平成27年9月）
- ⑭平成26年度自然環境調査（昆虫類）委託（平成27年3月）
- ⑮平成28年度自然環境調査（水生生物）委託（平成29年3月）
- ⑯平成31年度自然環境調査（昆虫類）委託（令和元年3月）
- ⑰令和3年度自然環境調査（水生生物）委託（令和4年3月）

出典：「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成28年改定、福岡市）

キ 底生動物

「自然環境情報地図【西区④】貴重・希少生物等確認地図 魚類・貝類・甲殻類その他」では、東西約 1.1km、南北約 0.9km のメッシュごとに貴重・希少生物の生息状況が整理されている。

底生動物（貝類・甲殻類）については、対象事業実施区域を含むメッシュの北側のメッシュにおいて、表 9.7.1-10 に示すとおりオオタニシ 1 種の貴重・希少な種の生息が報告されている。

表 9.7.1-10 貴重・希少な動物種の状況（底生動物）

種名	カテゴリー			出典															
	福岡県RDB	環境省RL	その他指定状況	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
オオタニシ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧 (NT)		○							○						○		

注：1) カテゴリー
福岡県RDB：福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014
—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）
環境省RL：環境省レッドリスト2020（令和2年3月）
その他の指定状況：天然記念物・種の保存法等の指定状況、専門家の指摘、福岡県希少野生動植物種の保護に関する条例

2) 出典
①福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014
—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—（平成26年8月）
②干潟学入門 和白干潟の生きものたち（平成6年9月）
③自然環境保全基礎調査浅海域生態系調査（干潟）（平成14年度）
④福岡市環境配慮指針（平成9年3月）
⑤平成12年度鳥類生息状況解析基礎調査委託業務（平成13年3月）
⑥平成15年度今津干潟保全対策調査委託（平成16年3月）
⑦環境手帳 宇美川と多々良川の合流部にすむ生き物（平成17年3月）
⑧平成19年度自然環境調査（外来生物の生息状況調査）委託（平成20年3月）
⑨平成19年度アイランドシティ環境モニタリング等調査委託（平成20年3月）
⑩平成19年度エコパークゾーン環境マップ作成業務委託（平成20年3月）
⑪アイランドシティ環境モニタリング業務委託（平成5～26年度）
⑫平成26年度新西部水処理センター環境モニタリング調査業務委託（平成27年3月）
⑬平成27年度多々良川水系感潮域環境調査業務委託（平成28年3月）
⑭九州大学統合移転事業環境監視調査 平成26年度 総合報告書（平成27年9月）
⑮平成28年度自然環境調査（水生生物）委託（平成29年3月）
⑯令和3年度自然環境調査（水生生物）委託（令和4年3月）

出典：「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成28年改定、福岡市）

② 注目すべき生息地

「環境アセスメントデータベース EADAS」（平成 29 年改訂、環境省）において整理されている全国環境情報の項目のうち、動物の生息の状況等を整理した結果は表 9.7.1-11 に示すとおりである。
対象事業実施区域の近隣地域には注目すべき生息地は含まれなかった。

表 9.7.1-11 動物の注目すべき生息地の分布状況の整理結果

EADAS による全国環境情報		分布状況
動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況（動物）	イヌワシ・クマタカ生息分布	分布域に含まれない
	ガン類・ハクチョウ類の主要な終結地	分布域に含まれない
動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況（注目すべき生息地）	重要野鳥生息地（IBA）	1 km圏内には存在しない
	東アジア・オーストラリア地域渡り性水鳥重要生息地ネットワーク（EAAFP）国内参加地	1 km圏内には存在しない
	昆虫類の多様性保護のための重要地域	1 km圏内には存在しない
	海鳥繁殖地	1 km圏内には存在しない
	海の重要野鳥生息地（マリーン IBA）	1 km圏内には存在しない

(2) 現地調査

① ほ乳類

ほ乳類については、表 9.7.1-12 に示すとおり、7 目 10 科 13 種が確認された。

確認された種は、アブラコウモリやタヌキ等の市街地や都市公園等にも生息する種も含まれ、改変区域内ではアブラコウモリ、ニホンザル、ノウサギ、アライグマ、タヌキ、キツネ、ホンドテン、アナグマ、ノネコ、イノシシの 10 種が確認された。

環境別の確認状況を表 9.7.1-13 に示す。ノウサギやアライグマ、タヌキ、ホンドテン、アナグマは落葉二次林（環境 1）や常緑二次林（環境 3）、造成林（環境 4）等の樹林環境や草地（環境 5）をよく利用していた。イノシシは、樹林環境や草地に加えて緑の多い施設（環境 7）や団地（環境 8）等の人工的な環境まで広く利用していた。また、面積が限られる水辺（環境 6）でも比較的多くの種の利用がみられた。

表 9.7.1-12 ほ乳類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期			
					秋季	冬季	春季	夏季
1	モグラ	モグラ	コウベモグラ	<i>Mogera mogura</i>		●	●	●
2	コウモリ	ヒナコウモリ	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>			●	●
3	サル	オナガザル	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>				●
4	ウサギ	ウサギ	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>	●	●	●	●
5	ネズミ	ネズミ	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>			●	
6	ネコ	アライグマ	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	●	●	●	●
7		イヌ	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	●	●	●	●
8			キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>				●
9		イタチ	ホンドテン	<i>Martes melampus melampus</i>	●	●	●	●
10			シベリアイタチ	<i>Mustela sibirica</i>	●		●	
11			アナグマ	<i>Meles anakuma</i>	●		●	●
12		ネコ	ノネコ	<i>Felis catus</i>			●	●
13	ウシ	イノシシ	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	●	●	●	●
合計	7目	10科	13種	-	7種	6種	11種	11種

注：分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和4年度生物リスト」（国土交通省、令和4年）に従った。シベリアイタチ（チョウセンイタチ）については、現地調査時には種の特定ができなかったが、糞のDNA分析結果からはシベリアイタチのみ検出された。

表 9.7.1-13 ほ乳類の確認種一覧（環境別確認状況）

No.	種	環境1	環境2	環境3	環境4	環境5	環境6	環境7	環境8	環境9
		落葉二次林	植林	常緑二次林	造成林	草地	水辺	緑の多い施設等	緑のある団地等	緑の少ない施設等
1	コウベモグラ	●	●	●	●	●		●		●
2	アブラコウモリ					●	●	●		●
3	ニホンザル									
4	ノウサギ	●		●	●	●				
5	アカネズミ	●				●				
6	アライグマ	●		●	●	●	●			
7	タヌキ	●		●	●	●	●			
8	キツネ									
9	ホンドテン	●		●	●	●	●		●	
10	シベリアイタチ	●							●	
11	アナグマ	●		●	●	●	●			
12	ノネコ			●	●	●	●	●	●	●
13	イノシシ	●		●	●	●	●	●	●	
合計	13種	9種	2種	8種	10種	10種	8種	4種	4種	3種

② 鳥類（一般鳥類）

鳥類（一般鳥類）については、表 9.7.1-14 に示すとおり、13 目 29 科 57 種が確認された。

確認された種は、カワラバトやキジバト、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、メジロ、ハクセキレイ等の市街地や都市公園等に生息する鳥類が多く確認された。カモ類やサギ類、カワセミ等の水辺の鳥類、ヤマドリやアオバト、キツツキ類、ヒタキ類等の樹林性の鳥類も確認された。

環境別の確認状況を表 9.7.1-15 に示す。コゲラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロは緑の多い施設等（環境 7）や緑のある団地等（環境 8）、緑の少ない施設等（環境 9）、
等の人工的な要素の多い場所を含む、多様な環境を広く利用していた。一方で、カモ類やカイツブリ、オオバン、サギ類、カワセミは水辺（環境 6）やその近隣のみ、
アオゲラ、エナガ、
コサメビタキ、イカル等は
に限られた。

表 9.7.1-14 鳥類（一般鳥類）の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期					季節 移動型
					秋季	冬季	春季	初夏	夏季	
1	キジ	キジ	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracicus</i>				●		留鳥
2			ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>				●		留鳥
3	カモ	カモ	ヨシガモ	<i>Anas falcata</i>		●				冬鳥
4			マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	●	●	●			冬鳥
5			カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	●					留鳥
6			コガモ	<i>Anas crecca</i>		●	●			冬鳥
7			ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>		●				冬鳥
8	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	●	●	●	●	●	留鳥
9	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)	<i>Columba livia</i>	●	●	●	●	●	留鳥
10			キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	●	●	●	●	●	留鳥
11			アオバト	<i>Treron sieboldii</i>		●	●			留鳥
12	カツオドリ	ウ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>		●	●			冬鳥
13	ペリカン	サギ	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>			●	●	●	留鳥
14			ダイサギ	<i>Ardea alba</i>			●	●		留鳥
15	ツル	クイナ	オオバン	<i>Fulica atra</i>		●	●			留鳥
16	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>				●		夏鳥
17	タカ	ミサゴ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>		●			●	留鳥
18		タカ	トビ	<i>Milvus migrans</i>	●	●	●	●		留鳥
19			ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	●					夏鳥
20			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>			●			冬鳥
21			サシバ	<i>Butastur indicus</i>			●			夏鳥
22	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	●	●	●	●	●	留鳥
23	キツツキ	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	●	●	●	●	●	留鳥
24			アオゲラ	<i>Picus awokera</i>			●	●		留鳥
25	ハヤブサ	ハヤブサ	チゴハヤブサ	<i>Falco subbuteo</i>	●					旅鳥
26			ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>		●	●	●	●	留鳥
27	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ (亜種リュウキュウサンショウクイ)	<i>Pericrocotus divaricatus tegimae</i>				●		留鳥
28		モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>		●				留鳥
29		カラス	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	●	●	●	●	●	留鳥
30			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	●	●	●	●	●	留鳥
31		シジュウカラ	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>	●	●	●	●	●	留鳥
32			シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	●	●	●	●	●	留鳥
33		ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>			●	●	●	夏鳥
34			コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>				●	●	夏鳥
35			イワツバメ	<i>Delichon dasypus</i>		●		●		留鳥
36		ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	●	●	●	●	●	留鳥
37		ウグイス	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>				●		留鳥
38		エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	●		●	●	●	留鳥
39		チメドリ	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>			●	●		留鳥
40		メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	●	●	●	●	●	留鳥
41		ムクドリ	ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	●					留鳥
42			コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>	●					旅鳥
43		ヒタキ	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>		●	●			冬鳥
44			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>			●			旅鳥/ 冬鳥
45			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>		●				冬鳥
46			ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>			●			冬鳥
47			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>		●				冬鳥
48			イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>	●	●	●	●	●	留鳥
49			コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	●		●			旅鳥
50			キビタキ	<i>Ficedula naciissina</i>	●		●	●	●	夏鳥
51		スズメ	スズメ	<i>Passer montanus</i>	●	●	●	●	●	留鳥
52		セキレイ	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	●		●			留鳥
53			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	●	●	●	●	●	留鳥
54		アトリ	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>		●				冬鳥
55			カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	●	●	●	●	●	留鳥
56			イカル	<i>Eophona personata</i>		●				留鳥
57		ホオジロ	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>		●				冬鳥
合計	13目	29科	57種	—	26種	33種	36種	31種	22種	—

注: 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和4年度生物リスト」(国土交通省、令和4年)に従った。季節移動型は「福岡県鳥類目録」(福岡県、平成23年)に従った。

表 9.7.1-15 鳥類（一般鳥類）の確認種一覧（環境別確認状況）

No.	種	環境1 落葉二次林	環境2 植林	環境3 常緑二次林	環境4 造成林	環境5 草地	環境6 水辺	環境7 緑の多い 施設等	環境8 緑のある 団地等	環境9 緑の少ない 施設等	環境10 ■ ■ ■ ■	環境11 ■ ■ ■ ■	環境12 ■ ■ ■ ■
1	コジュケイ				●								
2	ヤマドリ												
3	ヨシガモ						●				●		
4	マガモ						●				●	●	
5	カルガモ										●		
6	コガモ						●					●	
7	ホシハジロ											●	
8	カイツブリ						●				●		
9	カワラバト(ドバト)			●		●		●	●	●	●		
10	キジバト		●	●	●	●	●	●	●			●	●
11	アオバト												
12	カワウ	●					●		●				
13	アオサギ						●			●	●		
14	ダイサギ						●						●
15	オオバン						●				●		
16	アマツバメ					●				●			
17	ミサゴ		●	●						●			
18	トビ			●					●			●	
19	ツミ								●				
20	ハイタカ									●			
21	サシバ												●
22	カワセミ				●		●				●	●	
23	コゲラ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
24	アオゲラ	●	●	●									
25	チゴハヤブサ								●				
26	ハヤブサ	●	●	●	●	●				●			
27	サンショウウイ (亜種リュウキュウサンショウウイ)												●
28	モズ							●	●				
29	ハシボソガラス		●		●	●			●	●	●		
30	ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
31	ヤマガラ	●	●	●	●			●	●	●			●
32	シジュウカラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
33	ツバメ				●		●	●	●	●	●	●	
34	コシアカツバメ												
35	イワツバメ		●		●				●	●			
36	ヒヨドリ	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
37	ウグイス		●										
38	エナガ		●	●	●								●
39	ガビチョウ	●											●
40	メジロ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
41	ムクドリ						●		●		●	●	
42	コムクドリ												●
43	シロハラ	●		●	●	●	●	●	●		●	●	●
44	アカハラ	●			●								
45	ツグミ												●
46	ルリビタキ												●
47	ジョウビタキ								●			●	
48	イソヒヨドリ						●	●	●	●			
49	コサメビタキ												
50	キビタキ												
51	スズメ			●	●		●		●	●	●	●	
52	キセキレイ			●			●			●		●	
53	ハクセキレイ				●	●		●	●	●	●	●	
54	アトリ				●								
55	カワラヒワ	●			●	●		●	●	●	●	●	
56	イカル		●										
57	アオジ				●								
合計	57種	13種	14種	17種	22種	13種	21種	13種	23種	22種	20種	19種	20種

③ 鳥類（猛禽類）

鳥類（猛禽類）については、表 9.7.1-16 及び表 9.7.1-17 に示すとおり、2 目 3 科 10 種が確認された（トビを除く）。確認された種は、タカ目のミサゴ、ハチクマ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、ハヤブサ目のチョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ハヤブサであった。

表 9.7.1-16 鳥類（猛禽類）の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認年度	
					R4年	R5年
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	●	●
2		タカ	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	●	●
3			ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	●	
4			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	●	●
5			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	●	
6			サシバ	<i>Butastur indicus</i>	●	●
7			ノスリ	<i>Buteo buteo</i>		●
8	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>		●
9			チゴヤハブサ	<i>Falco subbuteo</i>	●	
10			ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	●	●
合計	2目	3科	10種	-	8種	7種

注:トビは含めない。一般鳥類調査においてのみ確認されたツミ及びチゴハヤブサを含む。

表 9.7.1-17 鳥類（猛禽類）の確認例数一覧

No.	種名	確認例数										一般鳥類 調査時
		令和4年					令和5年					
		4月	5月	6月	7月	8月	2月	3月	4月	5月	6月	
1	ミサゴ		2		2	2	2		4	1		冬1夏2
2	ハチクマ		2							2	1	
3	ツミ											秋1
4	ハイタカ	2					2	2	4			春1
5	オオタカ	2				3						
6	サシバ			1						2		春1
7	ノスリ						12	2	1			
8	チョウゲンボウ						1					
9	チゴヤハブサ											秋1
10	ハヤブサ	2	8	5	1		31	38	17	14	8	冬～夏9
合計	合計種数	3種	3種	2種	2種	2種	5種	3種	4種	4種	2種	6種
	合計例数	6例	12例	6例	3例	5例	48例	42例	26例	19例	9例	16例

注:トビは含めない。一般鳥類調査においてのみ確認されたツミ及びチゴハヤブサを含む。

・ミサゴ

[Redacted text block]

・ハチクマ

[Redacted text block]

・ツミ

[Redacted text block]

・ハイタカ

[Redacted text block]

・オオタカ

[Redacted text block]

・サシバ

[Redacted text block]

・ノスリ

[Redacted text block]

・チョウゲンボウ



・チゴハヤブサ



・ハヤブサ



④ 両生類

両生類については、表 9.7.1-18 に示すとおり、1 目 3 科 5 種が確認された。

確認された種は、タゴガエル、ニホンアカガエル、ウシガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエルの 5 種であったが、改変区域内では両生類は確認されなかった。

環境別の確認状況を表 9.7.1-19 に示す。タゴガエルは落葉二次林（環境 1）や常緑二次林（環境 3）の樹林環境でのみ確認された。

ウシガエルは水辺や緑の少ない施設で、ヌマガエルは水辺でのみ確認された。シュレーゲルアオガエルは草地や水辺を中心に、落葉二次林（環境 1）や緑の少ない施設（環境 9）の水路内等で確認された。

表 9.7.1-18 両生類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期				
					秋季	冬季 ^{注2}	早春季	春季 ^{注2}	夏季
1	無尾	アカガエル	タゴガエル	<i>Rana tagoi tagoi</i>					●
2			ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>		●	●	●	●
3			ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i>	●			●	●
4		ヌマガエル	ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>				●	
5		アオガエル	シュレーゲルアオガエル	<i>Zhangixalus schlegelii</i>				●	●
合計	1 目	3 科	5 種	-	1 種	1 種	1 種	4 種	4 種

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和4年度生物リスト」

（国土交通省、令和4年）に従った。

2) 冬季及び春季はほ乳類調査時に確認。

表 9.7.1-19 両生類の確認種一覧（環境別確認状況）

No.	種	環境1	環境2	環境3	環境4	環境5	環境6	環境7	環境8	環境9
		落葉二次林	植林	常緑二次林	造成林	草地	水辺	緑の多い施設等	緑のある団地等	緑の少ない施設等
1	タゴガエル	●		●						
2	ニホンアカガエル									
3	ウシガエル						●			●
4	ヌマガエル						●			
5	シュレーゲルアオガエル	●				●	●			●
合計	5 種	2 種	0 種	1 種	0 種	2 種	4 種	0 種	0 種	3 種

⑤ は虫類

は虫類については、表 9.7.1-20 に示すとおり、2 目 5 科 5 種が確認された。

確認された種は、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ、ミシシippアカミミガメの 5 種であった。そのうち、改変区域内で確認されたのはニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビの 3 種であった。

環境別の確認状況を表 9.7.1-21 に示す。ニホンヤモリは造成林（環境 4）の他、緑のある団地（環境 8）等や緑の少ない施設（環境 9）等で、ニホントカゲは落葉二次林（環境 1）の他、緑の多い施設（環境 7）等や緑の少ない施設（環境 9）等の人工的な環境で確認された。ニホンカナヘビは樹林や草地（環境 5）、緑のある団地（環境 8）等、様々な環境で確認された。シマヘビは緑の多い施設（環境 7）等でのみ、ミシシippアカミミガメは水辺（環境 6）でのみ確認された。

表 9.7.1-20 は虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期			
					秋季	早春季	春季	夏季 ^{注2}
1	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>	●	●	●	●
2		トカゲ	ニホントカゲ	<i>Plestiodon japonicus</i>				●
3		カナヘビ	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>			●	●
4		ナミヘビ	シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	●			
5	カメ	ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>			●	●
合計	2 目	5 科	5 種	-	2 種	1 種	3 種	4 種

注:1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和4年度生物リスト」

(国土交通省、令和4年)に従った。

2) 春季はほ乳類調査時に確認。

表 9.7.1-21 は虫類の確認種一覧（環境別確認状況）

No.	種	環境1	環境2	環境3	環境4	環境5	環境6	環境7	環境8	環境9
		落葉二次林	植林	常緑二次林	造成林	草地	水辺	緑の多い施設等	緑のある団地等	緑の少ない施設等
1	ニホンヤモリ				●				●	●
2	ニホントカゲ	●						●		●
3	ニホンカナヘビ	●	●	●	●	●			●	
4	シマヘビ							●		
5	ミシシippアカミミガメ						●			
合計	5 種	2 種	1 種	1 種	2 種	1 種	1 種	2 種	2 種	2 種

⑥ 魚類

魚類については、表 9.7.1-22 に示すとおり、3 目 4 科 5 種が確認された。

確認された種は、コイ（飼育型・型不明）オオギンブナ、ミナミメダカ、ドンコ、トウヨシノボリ類の 5 種であった。改変区域内に水辺（環境 6）は存在しないため魚類は確認されず、いずれも改変区域外での確認であった。

W-1 〇では、4 種の魚類が確認された。コイ（飼育型・型不明）〇等の遊泳性の魚類の他、ドンコやトウヨシノボリ類等の底生性の魚類が見られた。特にコイ類やフナ類については、産卵環境となり得る抽水植物群落が岸辺に見られることも踏まえると、〇繁殖していると考えられる。

W-2 〇では、3 種の魚類が確認された。主にドンコ等の底生性の魚類で、W-1 で見られたコイ等の大型の遊泳魚は確認されなかった。W-1 と比べてコイ等の産卵環境となる抽水植物群落が少ないためと推測される。

〇では、メダカ類 1 種のみ確認された。〇岸辺は人工的な石積みがなされており、池内には植栽と思われるキシノウブも見られた。この地点で確認されたメダカ類は生殖腺が肥大化する突然変異体であり、野生個体ではないと考えられる。このことからこの地点は人為的に整備された環境で、野生の魚類の生息環境としてほとんど利用されていないと考えられる。

表 9.7.1-22 魚類の確認種一覧

No.	目	科	種名	学名	確認時期				調査地点 (改変区域外)		
					秋季	早春季 ^{注1}	春季	夏季 ^{注1}	W-1	W-2	〇
1	コイ	コイ	コイ（飼育型）	<i>Cyprinus carpio</i>			●		○		
-			コイ（型不明）				●		○		
2			オオギンブナ ^{注3}	<i>Carassius buergeri buergeri</i>			●				
-			フナ属	<i>Carassius</i> sp.			●		○		
3	ダツ	メダカ	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i>	●						
-			メダカ類 ^{注4}	<i>Oryzias</i> sp.			●				○
4	スズキ	ドンコ	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i>	●	●	●		○	○	
5		ハゼ	トウヨシノボリ類	<i>Rhinogobius</i> sp. OR unidentified	●	●			○	○	
-			ヨシノボリ属	<i>Rhinogobius</i> sp.			●	●	○	○	
合計	3目	4科	5種	-	3種	2種	5種	1種	4種	3種	1種

注:1) 分類、種名、配列は令和4年度版「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」に従った。

早春季及び夏季は底生動物調査時に確認。

2) No. における「-」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたものについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。また、同じ種で「○型」として区分したものは全て含めて 1 種とした。

3) 持ち帰った標本を精査した結果、標準体長に対して体高が低く（標準体長/体高=2.64）、第一鰓弓の鰓耙数が 41、背びれ分岐軟条数が 16 であった。これらの特徴から、オオギンブナと同定した（参考：日本産魚類検索 全種の同定 第三版（中坊、2013））。

4) 腹部の肥大化した個体が群泳していた。生殖腺が肥大化する突然変異体で、野生個体ではないと考えられる。

⑦ 昆虫類

昆虫類については、表 9.7.1-23 及び表 9.7.1-24 に示すとおり、14 目 121 科 362 種が確認された。改変区域内では、ニイニイゼミ、ムラサキシジミ、アオドウガネ、カナブン等の樹林性の昆虫類やベニシジミ、ツマグロヒョウモン、セマダラコガネ、ナミテントウ等の草地性の昆虫類が中心に確認された。これらの種は植栽された樹木や草本類、造成跡の草地に生息していた。

目別の確認種数をみると、コウチュウ目、カメムシ目、チョウ目、ハチ目、ハエ目が多く、全体の 8 割以上を占めた。平地から丘陵地の草地や里山に生息する種が多く確認された。調査範囲では、広く生息が確認された種はシオカラトンボ、アゲハ、キタキチョウ、ニイニイゼミ、マルカメムシ、ナミテントウ、アミメアリ、トビイロシワアリ、ウメマツオオアリなどであった。

環境別の確認状況は表 9.7.1-25 に示すとおりである。

施設や団地（環境 7 から 9）等ではコブウンカ、クマゼミ、ヤマトシジミ本土亜種、ツマグロヒョウモン、アゲハ等が確認され、庭先や道路沿いに植栽された樹木や草本を利用していた。

落葉二次林（環境 1）や造成林（環境 4）ではルリタテハ本土亜種、クロアゲハ本土亜種、オオクロツヤヒラタゴミムシ、センチコガネ、カナブン、ノコギリクワガタなどが確認され、コナラ等の樹液や林床の落葉、ほ乳類の糞などを利用していた。

水辺（環境 6）ではクロイトトンボやチョウトンボなどの浮葉植物が繁茂するため池に生息するトンボ類やオオアオイトトンボ、モノサシトンボ、リスアカネなど周囲が樹林に囲まれたため池に生息するトンボ類が確認された。

草地（環境 5）ではハラオカメコオロギ、ショウリョウバッタ、ツチイナゴ、オンブバッタなどのバッタ類、ベニシジミ、キタキチョウ、モンシロチョウなどのチョウ類が確認された。

植林（環境 2）では昆虫類の確認が少なかった。

表 9.7.1-23 昆虫類の確認種一覧（目別確認状況）

No.	目名	科数	種数
1	イシノミ目	1	1
2	トンボ目	7	21
3	ゴキブリ目	1	2
4	カマキリ目	1	4
5	バッタ目	10	22
6	ナナフシ目	1	1
7	カメムシ目	20	53
8	ラクダムシ目	1	1
9	アミメカゲロウ目	3	3
10	トビケラ目	1	1
11	チョウ目	14	44
12	ハエ目	16	35
13	コウチュウ目	34	125
14	ハチ目	11	49
合計	14 目	121 科	362 種

表 9. 7. 1-24(1/6) 昆虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期		
					秋季	春季	夏季
1	イシノミ	イシノミ	Pedetontus属	<i>Pedetontus</i> sp.	●		
2	トンボ	アオイトトンボ	ホソミオツネントンボ	<i>Indolestes peregrinus</i>		●	
3			オオアオイトトンボ	<i>Lestes temporalis</i>	●		●
4		イトトンボ	ベニイトトンボ	<i>Ceriatrion nipponicum</i>			●
5			クロイトトンボ	<i>Paracercion calamorum calamorum</i>		●	
6		モノサシトンボ	モノサシトンボ	<i>Copera annulata</i>			●
7		ヤンマ	クロスジギンヤンマ	<i>Anax nigrofasciatus nigrofasciatus</i>	●	●	
8			ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>			●
9			ヤブヤンマ	<i>Polycanthagyna melanictera</i>			●
10		サナエトンボ	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus</i>			●
11		エゾトンボ	トラフトンボ	<i>Epithea marginata</i>		●	
12			コヤマトンボ	<i>Macromia amphigena amphigena</i>			●
13		トンボ	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>		●	●
14			オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania</i>			●
15			ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>	●	●	●
16			コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>			●
17			チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>			●
18			コノシメトンボ	<i>Sympetrum baccha matutinum</i>	●		
19			ナツアカネ	<i>Sympetrum darwinianum</i>	●		
20			マユタテアカネ	<i>Sympetrum eroticum eroticum</i>	●		●
21			リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>	●		
22			ベニトンボ	<i>Trithemis aurora</i>			●
23		ゴキブリ	チャバネゴキブリ	<i>Blattella nipponica</i>	●	●	●
24			ウスヒラタゴキブリ本土亜種	<i>Megamareta pallidiola pallidiola</i>			●
25	カマキリ	カマキリ	ヒナカマキリ	<i>Amantis nawai</i>			●
26			ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>	●		
27			コカマキリ	<i>Statilia maculata</i>	●		
28			チョウセンカマキリ	<i>Tenodera angustipennis</i>	●		
29	バッタ	ツユムシ	ツユムシ	<i>Phaneroptera falcata</i>	●		
30			ヒメクダマキモドキ	<i>Phaulula macilenta</i>	●		
31		キリギリス	オナガササキリ	<i>Conocephalus exemptus</i>	●		
32			ホシササキリ	<i>Conocephalus maculatus</i>	●		●
33			ササキリ	<i>Conocephalus melaenus</i>	●		
34			クビキリギス	<i>Euconocephalus varius</i>	●		
35			ニシキリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>			●
36		マツムシ	クチキコオロギ	<i>Duolandrevus ivani</i>	●		
37			アオマツムシ	<i>Truljalia hibinonis</i>	●		
38		コオロギ	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>	●		
39			モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>	●		
40			エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>	●		
41		カネタタキ	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>	●		
42		アリツカコオロギ	Myrmecophilus属	<i>Myrmecophilus</i> sp.		●	
43		ヒバリモドキ	シバスズ	<i>Polionemobius mikado</i>			●
44		バッタ	クサヒバリ	<i>Svistella bifasciata</i>	●		
45			ショウリョウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>			●
46			マダラバッタ	<i>Aiolopus thalassinus tamulus</i>	●		
47			ツマグロバッタ	<i>Stethophyma magister</i>			●
48			イナゴ	<i>Oxya japonica</i>	●		
49		オンブバッタ	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>	●	●	●
50			オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>	●		
51	ナナフシ	ナナフシ	タイワントビナナフシ	<i>Sipylloidea sipylus</i>	●		
52	カメムシ	ウンカ	コブウンカ	<i>Tropidocephala brunneipennis</i>		●	●
53		アオバハゴロモ	アオバハゴロモ	<i>Geisha distinctissima</i>			●
54			セミ	<i>Cryptotympana facialis</i>			●
55			アブラゼミ	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i>			●
56			ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>	●		
57			ニイニイゼミ	<i>Platypleura kaempferi</i>			●
58			ヒグラシ	<i>Tanna japonensis</i>			●
59		アワフキムシ	イシダアワフキ	<i>Aphrophora ishidae</i>	●		
60		ヨコバイ	ツマグロオオヨコバイ	<i>Bothrogonia ferruginea</i>		●	
61			カエデズキンヨコバイ	<i>Idiocerus ishiyamae</i>			●
62			マエジロオオヨコバイ	<i>Kolla atramentaria</i>	●		
63			オカダクワキヨコバイ	<i>Pagaronia okadai</i>		●	
64			クロヒラタヨコバイ	<i>Penthimia nitida</i>			●
65			マダラヨコバイ	<i>Psammotettix striatus</i>		●	
66			クロスジホソサジョコバイ	<i>Sophonia orientalis</i>		●	

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和 4 年度生物リスト」（国土交通省、令和 4 年）に従った。

2) No. における「－」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたもののについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

表 9.7.1-24 (2/6) 昆虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期		
					秋季	春季	夏季
67	カメムシ	キジラムシ	ベニキジラムシ	<i>Cacopsylla coccinea</i>		●	
68			カエデキジラムシ	<i>Cacopsylla japonica</i>		●	
69			サツマキジラムシ	<i>Cacopsylla satsumensis</i>		●	
70			マダラトベラキジラムシ	<i>Cacopsylla sp.</i>		●	
71			センダンコクロキジラムシ	<i>Metapsylla uei</i>		●	
72		ウタフキカイガラムシ	オオウラジカイガラムシ	<i>Drosicha corpulenta</i>	●		
73			クビナガカメムシ	<i>Hoplitocoris lewisi</i>			●
74		サシガメ	ヨコツナサシガメ	<i>Agriosphodrus dohrni</i>		●	
75			クロモンサシガメ	<i>Peirates turpis</i>	●		
76		グンバイムシ	アワダチソウグンバイ	<i>Corythucha marmorata</i>			●
77			ツツジグンバイ	<i>Stephanitis pyrioides</i>			●
78			トサカグンバイ	<i>Stephanitis takeyai</i>		●	
79		カスミカメムシ	ケブカキベリナガカスミカメ	<i>Dryophilocoris miyamotoi</i>		●	
80			クスベニヒラタカスミカメ	<i>Mansoniella cinnamomi</i>		●	
81			ヨモギヒョウタンカスミカメ	<i>Pilophorus okamotoi</i>			●
82			ケブカカスミカメ	<i>Tingitotum perlatum</i>	●		
83		ホソヘリカメムシ	クモヘリカメムシ	<i>Leptocoris chinensis</i>	●		
84			ホソヘリカメムシ	<i>Riptortus pedestris</i>	●		
85		ヘリカメムシ	ホシハラビロヘリカメムシ	<i>Homoeocerus unipunctatus</i>	●	●	
86			マツヘリカメムシ	<i>Leptoglossus occidentalis</i>	●		
87			キバラヘリカメムシ	<i>Plinactus bicoloripes</i>	●		
88		イトカメムシ	イトカメムシ	<i>Yemma exilis</i>			●
89		ナガカメムシ	ヨツボシヒョウタンナガカメムシ	<i>Gyndes pallicornis</i>			●
90			クロツヤナガカメムシ	<i>Lamproplax membranacea</i>	●	●	
91			オオモンシロナガカメムシ	<i>Metochus abbreviatus</i>		●	●
92			ヘリグロヒメナガカメムシ	<i>Nysius hidakai</i>			●
93		ツチカメムシ	コツチカメムシ	<i>Macroscytus fraterculus</i>		●	
94			ツチカメムシ	<i>Macroscytus japonensis</i>		●	●
95			マルツチカメムシ	<i>Microporus nigrita</i>		●	
96		カメムシ	ウズラカメムシ	<i>Aelia fieberi</i>			●
97			キマダラカメムシ	<i>Erthesina fullo</i>	●	●	●
98			ツヤアオカメムシ	<i>Glaucias subpunctatus</i>	●		
99			クサギカメムシ	<i>Halyomorpha halys</i>	●		
100			チャバネアオカメムシ	<i>Plautia stali</i>	●	●	
101		マルカメムシ	マルカメムシ	<i>Megacopta punctatissima</i>	●	●	●
102		アメンボ	アメンボ	<i>Aquarius paludum paludum</i>		●	
103			トガリアメンボ	<i>Rhagadotarsus kraepelini</i>	●		
104		メミズムシ	メミズムシ	<i>Ochterus marginatus</i>			●
105	ラクダムシ	ラクダムシ	ラクダムシ	<i>Inocellia japonica</i>		●	
106	アミメカゲロ	クサカゲロウ	イツホシアカマダラクサカゲロウ	<i>Pseudomallada cognatellus</i>		●	
107		ツノトンボ	ツノトンボ	<i>Ascalohybris subjacens</i>			●
108		ウスバカゲロウ	ウスバカゲロウ	<i>Baliga micans</i>	●		●
109	トビケラ	カクツツトビケラ	ツダカクツツトビケラ	<i>Lepidostoma tsudai</i>			●
110	チョウ	ミノガ	チャミノガ	<i>Eumeta minuscula</i>	●		
111			オオミノガ	<i>Eumeta variegata</i>	●		
112		ヒゲナガキバガ	フタテンホソバヒゲナガキバガ	<i>Lecithocera cerussata</i>			●
113		ハマキガ	トビモンコハマキ	<i>Diplocalyptis congruentana</i>			●
114			チャハマキ	<i>Homona magnanima</i>			●
115			コホソスジハマキ	<i>Neocalyptis angustilineata</i>			●
116		セセリチョウ	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata guttata</i>	●		
117			チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias oberthueri</i>	●		
118		シジミチョウ	ムラサキシジミ	<i>Arhopala japonica</i>	●		●
119			ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus ladonides</i>	●	●	●
120			クロマダラソテツシジミ	<i>Chilades pandava</i>	●		
121			ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>	●		●
122			ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas chinensis</i>	●	●	
123			ムシャクロツバメシジミ	<i>Tongeia filicaudis mushanus</i>	●		
124			ヤマトシジミ本土亜種	<i>Zizeeria maha argia</i>	●	●	
125			ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>	●	●	●
126		タテハチョウ	ルリタテハ本土亜種	<i>Kaniska canace nojaponicum</i>	●	●	
127			クロヒカゲ本土亜種	<i>Lethe diana diana</i>			●
128			クロコノマチョウ	<i>Melanitis phedima oitensis</i>	●		
129			コミスジ本州以南亜種	<i>Neptis sappho intermedia</i>		●	●
130			アカタテハ	<i>Vanessa indica indica</i>	●		
131			ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus argus</i>	●	●	●

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和 4 年度生物リスト」（国土交通省、令和 4 年）に従った。

2) No. における「－」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたもののについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

表 9.7.1-24 (3/6) 昆虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期		
					秋季	春季	夏季
132	チョウ	アゲハチョウ	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i>		●	
133			モンキアゲハ	<i>Papilio helenus nicconicolens</i>		●	
134			キアゲハ	<i>Papilio machaon hippocrates</i>			●
135			ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon thunbergii</i>			●
136			クロアゲハ本土亜種	<i>Papilio protenor demetrius</i>		●	●
137			アゲハ	<i>Papilio xuthus</i>		●	●
138		シロチョウ	モンキチョウ	<i>Colias erate poliographa</i>			●
139			キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>	●	●	●
140			モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i>	●	●	●
141		メイガ	ウスアカムラサキマダラメイガ	<i>Addyme confusalis</i>		●	
142			ネアカマダラメイガ	<i>Etielloides bipartitellus</i>		●	
143		シャクガ	フタテンオエダシャク	<i>Chiasmia defixaria</i>		●	
144			ヨスジキヒメシャク	<i>Idaea auricruda</i>			●
145			ナミスジコアオシャク	<i>Idiochlora ussuriaria</i>			●
146			クロミスジシロエダシャク	<i>Myrteta angelica angelica</i>	●		
147			キトビカギバエダシャク	<i>Pseudonadagara semicolor</i>			●
148		スズメガ	ウンモンズズメ	<i>Callambulyx tatarinovii gabyae</i>			●
149		ドクガ	カシワマイマイ本土亜種	<i>Lymantria mathura aurora</i>			●
150		ヤガ	フクラスズメ	<i>Arcte coerula</i>			●
151			ムラサキツマキリアツバ	<i>Pangrapta curtalus</i>			●
152			コマルモンシロガ	<i>Sphragifera biplaga</i>		●	
153		コブガ	リュウキュウキノカワガ	<i>Risoba prominens</i>		●	
154	ハエ	ガガンボ	Tipula属	<i>Tipula</i> sp.	●		
155		スカカ	スカカ科	Ceratopogonidae gen. sp.	●		
156		ユスリカ	セスジユスリカ	<i>Chironomus yoshimatsui</i>		●	
157			フタスジツヤユスリカ	<i>Cricotopus bicinctus</i>		●	
158			—	Cricotopus属		●	
158			ヒロバネエリユスリカ	<i>Orthocladus glabripennis</i>		●	
159			—	Orthocladus属		●	
159			キイロケバネエリユスリカ	<i>Parametriocnemus stylatus</i>		●	
160			ウスイロカユスリカ	<i>Procladius choreus</i>		●	
161			ビロウドエリユスリカ	<i>Smittia aterrima</i>		●	
161			—	ユスリカ科	●		
162		カ	カ科	Culicidae gen. sp.	●		
163		キノコバエ	キノコバエ科	Mycetophilidae gen. sp.	●		
164		クロバネキノコバエ	クロバネキノコバエ科	Sciaridae gen. sp.	●	●	
165		ミズアブ	キイロコウカアブ	<i>Ptecticus aurifer</i>			●
166		ムシヒキアブ	アオメアブ	<i>Cophinopoda chinensis</i>			●
167			オオイシアブ	<i>Laphria mitsukurii</i>		●	
168			ナミマガリケムシヒキ	<i>Neoitamus angusticornis</i>		●	
169			シオヤアブ	<i>Promachus yesonicus</i>			●
170		ツリアブ	コウヤツリアブ	<i>Anthrax aygulus</i>			●
171			ビロウドツリアブ	<i>Bombylius major</i>		●	
172		ハナアブ	ホソヒラタアブ	<i>Episyrphus balteatus</i>	●	●	
173			キゴシハナアブ	<i>Eristalinus quinquestriatus</i>			●
174			フタホシヒラタアブ	<i>Eupeodes corollae</i>	●		
175			Melanostoma属	<i>Melanostoma</i> sp.	●		
176			オオハナアブ	<i>Phytomia zonata</i>			●
177			ミナミヒメヒラタアブ	<i>Sphaerophoria indiana</i>			●
178			ホソヒメヒラタアブ	<i>Sphaerophoria macrogaster</i>		●	
179			ナミルリイロハラナガハナアブ	<i>Xylota amamiensis</i>			●
180		ノミバエ	ノミバエ科	Phoridae gen. sp.	●		
181		ショウジョウバエ	ショウジョウバエ科	Drosophilidae gen. sp.			●
182		ミギワバエ	ニノミヤトビクチャミギワバエ	<i>Brachydeutera ibari</i>	●		
183		ハナバエ	ヒメハナバエ属	—	●		
184		クロバエ	オオクロバエ	<i>Calliphora nigribarbis</i>	●	●	
185			ツマクロキンバエ	<i>Stomorphina obsoleta</i>		●	●
186		イエバエ	ギョウギシバクキイエバエ	<i>Atherigona reversura</i>	●		
187			ミドリイエバエ	<i>Neomyia timorensis</i>			●
188			ヘリグロハナレメイバエ	<i>Orchisia costata</i>			●
189			トゲアトキリゴミムシ	<i>Aephnidius adelioides</i>			●
190	コウチュウ	オサムシ	ヒメツヤマルガタゴミムシ	<i>Amara nipponica</i>	●		
191			ヒメゴミムシ	<i>Anisodactylus tricuspidatus tricuspidatus</i>		●	
192			マイマイカブリ	<i>Carabus blaptoides blaptoides</i>		●	
193			ヒメオサムシ	<i>Carabus japonicus japonicus</i>			●
194			ヤコンオサムシ	<i>Carabus yacoinus yacoinus</i>		●	

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和 4 年度生物リスト」（国土交通省、令和 4 年）に従った。

2) No. における「—」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたもののについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

表 9.7.1-24 (4/6) 昆虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期		
					秋季	春季	夏季
195	コウチュウ	オサムシ	アトワアオゴミムシ	<i>Chlaenius virgulifer</i>		●	
196			ホシハネビロアトギリゴミムシ	<i>Lebia calycophora</i>			●
197			ウエノコミズギワゴミムシ	<i>Paratachys uenoianus</i>			●
198			フタホシスジハネゴミムシ	<i>Planetes puncticeps</i>		●	●
199			ムナビロヒメナガゴミムシ	<i>Pterostichus straneoi</i>	●		
200			マルガタツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus arcuaticollis</i>	●		
201			クロツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus cycloclerus</i>	●		
202			ヒメツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus dulcigradus</i>	●		
203			オオクロツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus nitidus</i>	●	●	
204			クリイロコミズギワゴミムシ	<i>Tachyura fumicata</i>			●
205		ハンミョウ	ニワハンミョウ	<i>Cicindela japana</i>			●
206			ナミハンミョウ	<i>Sophiodela japonica</i>		●	
207		ゲンゴロウ	ナガマルチビゲンゴロウ	<i>Leiodytes kyushuensis</i>			●
208		ガムシ	アカケシガムシ	<i>Cercyon olivus</i>			●
209			コモシジミガムシ	<i>Laccobius oscillans</i>			●
210			ヒメガムシ	<i>Sternolophus rufipes</i>			●
211		タマキノコムシ	Dermatohomoeus 属	<i>Dermatohomoeus</i> sp.			●
212		ハネカクシ	ルイスツヤセシハネカクシ	<i>Anotylus lewisius</i>			●
213			Carpelimus 属	<i>Carpelimus</i> sp.			●
214			ウンゼンマルズハネカクシ	<i>Domene unzenensis</i>		●	
215			クロズトガリハネカクシ	<i>Lithocharis nigriceps</i>			●
216			ハバビロハネカクシ	<i>Megarthus japonicus</i>		●	
217			アカバヒメホソハネカクシ	<i>Neobisnius pumilus</i>			●
218			ルイスクビブトハネカクシ	<i>Pinophilus lewisius</i>			●
219			アカバトガリオズハネカクシ	<i>Platydacus brevicornis</i>			●
220			Sepedophilus 属	<i>Sepedophilus</i> sp.		●	
—			ハネカクシ科	Staphylinidae gen. sp.		●	
221		マルハナノミ	トビイロマルハナノミ	<i>Scirtes japonicus</i>		●	
222		センチコガネ	センチコガネ	<i>Phelotrupes laevistriatus</i>	●	●	●
223		クワガタムシ	ヒラタクワガタ本土亜種	<i>Dorcus titanus pilifer</i>	●		
224			ノコギリクワガタ	<i>Prosopocoilus inclinatus inclinatus</i>			●
225		コガネムシ	アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa albopilosa</i>			●
226			ツヤコガネ	<i>Anomala lucens</i>			●
227			セマダラコガネ	<i>Exomala orientalis</i>			●
228			コアオハナムグリ	<i>Gametis jucunda</i>		●	
229			ナガチャコガネ	<i>Heptophylla picea</i>			●
230			カミヤビロウドコガネ	<i>Maladera kamiyai</i>			●
231			ハラゲビロウドコガネ	<i>Nipponoserica pubiventris</i>		●	
232			ヒラタハナムグリ	<i>Nipponovalgus angusticollis angusticollis</i>		●	
233			ツヤエンマコガネ	<i>Parascatonomus nitidus</i>			●
234			カナブン	<i>Pseudotrynorhina japonica</i>			●
235		ヒメドロムシ	アシナガミゾドロムシ	<i>Stenelmis vulgaris</i>			●
236		コメツキムシ	サビキコリ	<i>Agrypnus binodulus binodulus</i>			●
237			ムナビロサビキコリ	<i>Agrypnus cordicollis</i>			●
238			クシコメツキ	<i>Melanotus legatus legatus</i>			●
239			クロクシコメツキ	<i>Melanotus senilis senilis</i>		●	
240			ヒゲコメツキ	<i>Pectocera hige hige</i>		●	
241			アカアシオクシコメツキ	<i>Spheniscosomus cete cete</i>		●	
242			ヒラタクシコメツキ	<i>Spheniscosomus koikei</i>		●	
243		ジョウカイボン	ハヤトクビボソジョウカイ	<i>Asiopodabrus hayato</i>		●	
244			セボシジョウカイ	<i>Lycocerus vitellinus</i>		●	
245			クロスジツマキジョウカイ	<i>Malthinus mucoreus</i>		●	
246			マルムネジョウカイ	<i>Prothemus ciusianus</i>		●	
247		シバンムシ	ザウテルシバンムシ	<i>Falsogastrallus sauteri</i>			●
—			シバンムシ科	Anobiidae gen. sp.			●
248		ジョウカイモドキ	クギヌキヒメジョウカイモドキ	<i>Ebaeus oblongulus</i>		●	
249			ヒロオビジョウカイモドキ	<i>Intybia historio</i>			●
250		テントウムシ	ムーアシロホシテントウ	<i>Calvia muii</i>		●	●
251			ナナホシテントウ	<i>Coccinella septempunctata</i>		●	
252			ナミテントウ	<i>Harmonia axyridis</i>		●	●
253			キイロテントウ	<i>Kihiro koebelei koebelei</i>			●
254			オオタツマアカヒメテントウ	<i>Scymnus rectus</i>		●	
255			クロテントウ	<i>Telsimia nigra</i>		●	

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和 4 年度生物リスト」（国土交通省、令和 4 年）に従った。

2) No. における「—」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたものについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

表 9.7.1-24 (5/6) 昆虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期		
					秋季	春季	夏季
256	コウチュウ	キスイムシ	クロモンキスイ	<i>Cryptophagus decoratus</i>	●		
257		ヒラタムシ	セマルチビヒラタムシ	<i>Xylolestes laevior</i>		●	
258		オオキノコムシ	アカハバヒロオオキノコムシ	<i>Neotriplax lewisii</i>		●	
259		オオキスイムシ	ヨツボシオオキスイ	<i>Helota gemmata</i>			●
260		コメツキモドキ	ヒメムクゲオオキノコ	<i>Cryptophilus propinquus</i>		●	
261		ケシキスイ	モンチビヒラタケシキスイ	<i>Epuraea ocularis</i>		●	
262			アカマダラケシキスイ	<i>Phenolia picta</i>			●
263			ウスオビカケシキスイ	<i>Pocadites dilatimanus</i>		●	
264			マルキマダラケシキスイ	<i>Stelidota multiguttata</i>	●	●	●
265		ヒメハナムシ	ヒメハナムシ科	Phalacridae gen. sp.		●	
266		ハナノミ	Falsomordellistena属	<i>Falsomordellistena</i> sp.			●
267			チャイロヒメハナノミ	<i>Glipostenoda rosseola</i>			●
268		カミキリモドキ	キアシカミキリモドキ	<i>Oedemera manicata</i>		●	
269			フタイロカミキリモドキ	<i>Oedemera sexualis sexualis</i>		●	
270		ゴミムシダマシ	クリイロクチキムシ	<i>Borboressthes acicularis</i>			●
271			ホンドトビイロクチキムシ	<i>Borboressthes cruralis</i>			●
272			ホンクロホシテントウゴミムシダマシ	<i>Derispia maculipennis</i>			●
273			コスナゴミムシダマシ	<i>Gonocephalum coriaceum</i>		●	
274			セスジナガキマワリ本土亜種	<i>Strongylium cultellatum cultellatum</i>			●
275		カミキリムシ	ビロウドカミキリ	<i>Acalolepta fraudatrix fraudatrix</i>			●
276			ニセビロウドカミキリ	<i>Acalolepta sejuncta sejuncta</i>			●
277			キバネニセハムシハナカミキリ	<i>Lemula decipiens</i>		●	
278			ナガゴマフカミキリ	<i>Mesosa longipennis</i>			●
279			タカサゴシロカミキリ	<i>Olenecamptus formosanus</i>			●
280			ワモンサビカミキリ	<i>Pterolophia annulata</i>			●
281			シロオビチビカミキリ	<i>Sybra subfasciata subfasciata</i>		●	
282		ハムシ	ツブノミハムシ	<i>Aphthona perminuta</i>		●	
283			サメハダツブノミハムシ	<i>Aphthona strigosa</i>		●	●
284			ヘリグロテントウノミハムシ	<i>Argopistes coccinelliformis</i>		●	
285			クロウリハムシ	<i>Aulacophora nigripennis nigripennis</i>		●	
286			ムシクソハムシ	<i>Chlamisus spilotus</i>		●	
287			ヨモギハムシ	<i>Chrysolina aurichalcea</i>	●	●	
288			バラルリツツハムシ	<i>Cryptocephalus approximatus</i>		●	
289			マダラカサハラハムシ	<i>Demotina fasciculata</i>		●	
290			カサハラハムシ	<i>Demotina modesta</i>		●	●
—			Demotina属	<i>Demotina</i> sp.			●
291			フジハムシ	<i>Gonioctena rubripennis</i>		●	
292			ケブカクロナガハムシ	<i>Hesperomorpha hirsuta</i>		●	
293			クロボシトビハムシ	<i>Longitarsus bimaculatus</i>		●	
294			ヨモギアシナガトビハムシ	<i>Longitarsus succineus</i>			●
295			クビアカトビハムシ	<i>Luperomorpha pryeri</i>			●
296			ニレハムシ	<i>Pyrrhalta maculicollis</i>			●
297		ヒゲナガゾウムシ	ムモンチビヒゲナガゾウムシ	<i>Uncifer difficilis</i>			●
298			ヒレルホソクチゾウムシ	<i>Sergiola hilleri</i>		●	
299		オトシブミ	コナライクビチョッキリ	<i>Deporaus unicolor</i>		●	
300			ハギルリオトシブミ	<i>Euops lespedezae lespedezae</i>		●	●
301		ゾウムシ	フクオカツヤツチゾウムシ	<i>Asphalmus fukuokaensis</i>		●	
—			Asphalmus属	<i>Asphalmus</i> sp.		●	
302			ケブカクチブトゾウムシ	<i>Lepidepistomodes fumosus</i>		●	
303			ウスアオクチブトゾウムシ	<i>Lepidepistomus elegantulus</i>			●
304			ネジキトゲムネサルゾウムシ	<i>Mecysmoderes brevicarinatus</i>			●
305			チビヒョウタンゾウムシ	<i>Myosides seriehispidus</i>		●	
306			オオクチブトゾウムシ	<i>Phyllolytus variabilis</i>			●
307			スグリゾウムシ	<i>Pseudocneorhinus bifasciatus</i>			●
308			ヒレルクチブトゾウムシ	<i>Pseudoedophrys hilleri</i>		●	
309			ホソゲチビツチゾウムシ	<i>Trachyphloeosoma advena</i>	●		
310		チビゾウムシ	ヒシチビゾウムシ	<i>Nanophyes japonicus</i>			●
311		ナガキクイムシ	カシノナガキクイムシ	<i>Platypus quercivorus</i>			●
312		クイムシ	ミカドクイムシ	<i>Scolytotlatypus mikado</i>		●	
313			サクキクイムシ	<i>Xylosandrus crassiusculus</i>		●	
—			クイムシ科	Scolytidae gen. sp.		●	

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和 4 年度生物リスト」（国土交通省、令和 4 年）に従った。

2) No. における「—」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたものについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

表 9.7.1-24 (6/6) 昆虫類の確認種一覧

No.	目	科	種	学名	確認時期		
					秋季	春季	夏季
314	ハチ	ミフシハバチ	ルリチュウレンジ	<i>Arge similis</i>		●	
315		ヒメバチ	アオムシヒラタヒメバチ	<i>Itoplectis naranyae</i>	●		
316		アリ	アシナガアリ	<i>Aphaenogaster famelica</i>	●	●	●
317			オオハリアリ	<i>Brachyponera chinensis</i>	●	●	●
318			イトウオオアリ	<i>Camponotus itoi</i>		●	
319			クロオオアリ	<i>Camponotus japonicus</i>		●	●
320			ヒラズオオアリ	<i>Camponotus nipponicus</i>			●
321			ウメマツオオアリ	<i>Camponotus vitiosus</i>		●	●
322			ヤマヨツボシオオアリ	<i>Camponotus yamaokai</i>			●
323			ツヤシリアゲアリ	<i>Crematogaster nawai</i>		●	●
324			キイロシリアゲアリ	<i>Crematogaster osakensis</i>	●	●	●
325			テラニシシリアゲアリ	<i>Crematogaster teranishii</i>	●	●	●
326			ハヤシクロヤマアリ	<i>Formica hayashi</i>		●	●
327			クロヤマアリ	<i>Formica japonica (s. l.)</i>	●		●
328			トビイロケアリ	<i>Lasius japonicus</i>	●	●	●
329			ヒラアシクサアリ	<i>Lasius spathepus</i>			●
330			クロヒメアリ	<i>Monomorium chinense</i>			●
331			ヒメアリ	<i>Monomorium intrudens</i>		●	●
332			カドフシアリ	<i>Myrmecina nipponica</i>		●	●
333			アメイロアリ	<i>Nylanderia flavipes</i>	●	●	●
334			アズマオオズアリ	<i>Pheidole fervida</i>			●
335			ツヤオオズアリ	<i>Pheidole megacephala</i>			●
336			オオズアリ	<i>Pheidole noda</i>	●	●	●
337			アミメアリ	<i>Pristomyrmex punctatus</i>	●	●	●
338			ヒラタウロコアリ	<i>Strumigenys canina</i>	●		
339			ムネボソアリ	<i>Temnothorax congruus</i>		●	
340			オオシワアリ	<i>Tetramorium bicarinatum</i>		●	
341			キイロオオシワアリ	<i>Tetramorium nipponense</i>		●	●
342			トビイロシワアリ	<i>Tetramorium tsushimae</i>		●	●
343		スズメバチ	オオフトアオビドロバチ本土亜種	<i>Anterhynchium flavomarginatum micado</i>			●
344			ミカドドロバチ本土亜種	<i>Euodynerus nipanicus nipanicus</i>			●
345			ヤマトアシナガバチ	<i>Polistes japonicus</i>			●
346			セグロアシナガバチ本土亜種	<i>Polistes jokahamae jokahamae</i>	●		●
347			コガタスズメバチ	<i>Vespa analis</i>			●
348			ヒメスズメバチ	<i>Vespa ducalis</i>		●	●
349			オオスズメバチ	<i>Vespa mandarinia</i>	●	●	●
350			クロスズメバチ	<i>Vespula flaviceps</i>	●		
351		クモバチ	ベッコウクモバチ	<i>Cyphononyx fulvognathus</i>			●
352		ツチバチ	コモンツチバチ	<i>Scolia decorata ventralis</i>			●
353		ギングチバチ	リュウキュウコオロギバチ	<i>Liris deplanata binghami</i>		●	
354			ナミコオロギバチ本土琉球亜種	<i>Liris subtessellatus subtessellatus</i>	●		
355		ヒメハナバチ	コマチマメヒメハナバチ	<i>Andrena komachi</i>		●	
356		ミツバチ	ニホンミツバチ	<i>Apis cerana japonica</i>	●	●	●
357			コマルハナバチ本土亜種	<i>Bombus ardens ardens</i>		●	
358			ハリマキマダラハナバチ	<i>Nomada harimensis</i>		●	
359			キムネクマバチ	<i>Xylocopa appendiculata circumvolans</i>		●	
360		コハナバチ	エサキヤドリコハナバチ	<i>Sphecodes similimus</i>		●	
361		ハキリバチ	オオハキリバチ	<i>Megachile sculpturalis</i>			●
362			ツツハナバチ	<i>Osmia taurus</i>		●	
合計	14目	121科	362種	—	110種	159種	181種

注：1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和4年度生物リスト」（国土交通省、令和4年）に従った。

2) No. における「—」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたもののについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

表 9.7.1-25 昆虫類の確認種一覧（環境別確認状況）

確認種	環境1	環境2	環境3	環境4	環境5	環境6	環境7	環境8	環境9
	落葉二次林	植林	常緑二次林	造成林	草地	水辺	緑の多い施設等	緑のある団地等	緑の少ない施設等
合計	115種	24種	60種	102種	69種	96種	102種	57種	69種

⑧ 底生動物

底生動物については、表 9.7.1-26 及び表 9.7.1-27 に示すとおり、5 門 7 綱 18 目 35 科 68 種が確認された。目別の確認種数をみると、ハエ目、トンボ目、カメムシ目、コウチュウ目の昆虫綱 4 目が多く、全体の 6 割程度を占めた。改変区域内に水辺（環境 6）は存在しないため底生動物は確認されず、いずれも改変区域外での確認であった。

W-1 では、48 種の底生動物が見られた。特にヒメモノアラガイ等の巻貝類、コウチュウ類が特徴的に確認された。また、トンボ類では開放的な環境を好むオオヤマトンボや抽水植物の繁茂する環境を好むヨツボシトンボが確認された。これは、この地点では岸辺に抽水植物群落が確認されたり、ヒシやスイレンが繁茂していたり、開放的な水面が見られたりと、W-2 と比べて多様な環境が見られたためと考えられる。その他にモクズガニのように両側回遊（産卵等のため、淡水と海水を往復すること。）を行う種も確認され、海域との連続性が示唆された。

W-2 では、33 種の底生動物が確認された。スジエビ等の甲殻類、ヒメアメンボ等のアメンボ類、ユスリカ類等が比較的多く確認された一方、W-1 で確認された巻貝類やコウチュウ類はほとんど確認されなかった。この地点は W-1 と比べて抽水植物が少なく、開放水面が広がる一方でヒシ等の浮葉植物が少ない等、単調な環境であった。そのため、確認種が限られる傾向にあったと考えられる。一方、ミナミテナガエビやモクズガニ等、両側回遊を行う種も確認され、海域との連続性が示唆された。

では、15 種の底生動物が確認された。水路内では一部に土砂が堆積して小さな中洲を形成し、そこに植物が生育していた。この地点ではニッポンヨコエビ、オニヤンマ、ヤマトクロスジヘビトンボといった小規模な流水環境で見られる種が確認されたほか、オニギリマルケシゲンゴロウやオガタツヤヒラタガムシといった小型のコウチュウ類も確認された。

表 9.7.1-26 底生動物の確認種一覧（目別確認状況）

門名	綱名	目名	科数	種数
扁形動物門	有棒状体綱	三岐腸目	1	1
軟体動物門	腹足綱	汎有肺目	4	5
		マイマイ目（柄眼目）	1	1
環形動物門	ミミズ綱	イトミミズ目	1	5
	ヒル綱	吻蛭目	1	1
		吻無蛭目	1	1
節足動物門	軟甲綱	ヨコエビ目	1	1
		ワラジムシ目	1	1
		エビ目	3	4
	昆虫綱	カゲロウ目（蜉蝣目）	1	2
		トンボ目（蜻蛉目）	6	9
		カワゲラ目（セキ翅目）	2	2
		カメムシ目（半翅目）	4	8
		ヘビトンボ目	1	1
		トビケラ目（毛翅目）	2	2
		ハエ目（双翅目）	2	16
		コウチュウ目（鞘翅目）	2	7
苔虫動物門	被喉綱	ハネコケムシ目	1	1
5門	7綱	18目	35科	68種

表 9.7.1-27 底生動物の確認種一覧

No.	門	綱	目	科	種	学名	確認時期			調査地点 (改変区域外)			
							秋季	早春季	夏季	W-1	W-2		
1	扁形動物 軟体動物	有棒状体 腹足	三岐腸	サンカクアタマウズムシ	サンカクアタマウズムシ科	Dugesiidae sp.			●			○	
2						モノアラガイ	ヒメモノアラガイ	<i>Orientogalba ollula</i>			●	○	
3							ハブタエモノアラガイ	<i>Pseudosuccinea columella</i>			●	○	
4						サカマキガイ	サカマキガイ	<i>Physella acuta</i>		●	●	○	○
5						ヒラマキガイ	ヒラマキガイ科	Planorbidae sp.			●	○	
6						カワコザラガイ	カワコザラガイ科	Ancylidae sp.			●	○	
7				マイマイ (柄眼)	オカモノアラガイ	ナガオカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i>						
8	環形動物	ミミ	イトミミズ	ミズミミズ	エラオイミズミミズ属	<i>Branchiodrilus</i> sp.			●	○			
9					ビフヨゴレイトミミズ	<i>Emboloccephalus vamauchii</i>		●		○			
10					ユリミミズ	<i>Limnodrilus hoffmeisteri</i>		●		○			
11					フサゲミズミミズ	<i>Ripistes parasita</i>		●			○		
12					ヨゴレミズミミズ	<i>Slavina appendiculata</i>		●		○	○		
-					ヨゴレミズミミズ属	<i>Slavina</i> sp.			●	○			
-					ミズミミズ科	Naididae sp.			●	●	○	○	
13	ヒル	吻蛭	ヒラタビル	ヒラタビル科	Glossiphoniidae sp.			●	○	○			
14		吻無蛭	ナガレビル	ナガレビル科	Salifidae sp.		●			○			
15	節足	軟甲	ヨコエビ	ヨコエビ	ニッポンヨコエビ	<i>Gammarus nipponensis</i>			●			○	
-			-	ヨコエビ目	Amphipoda sp.			●			○		
16			ワラジムシ エビ	ミズムシ (甲)	ミズムシ (甲)	<i>Asellus hilgendorfi hilgendorfi</i>		●	●	○	○		
17				ヌマエビ	カワリヌマエビ属	<i>Neocaridina</i> sp.	●		●	○	○		
18				テナガエビ	ミナミテナガエビ	<i>Macrobrachium formosense</i>	●					○	
19				スズエビ	<i>Palaemon paucidens</i>	●	●	●	○	○			
20			昆虫	カゲロウ (蜉蝣)	モクズガニ	モクズガニ	<i>Eriocheir japonica</i>	●		●	○	○	
21	コカゲロウ	フタバコカゲロウ属			<i>Baetiella</i> sp.			●	○	○			
22		コカゲロウ科			Baetidae sp.			●			○		
23	イトトンボ	クロイトトンボ			<i>Paracercion calamorum calamorum</i>			●	○	○			
-	トンボ (蜻蛉)	クロイトトンボ属		<i>Paracercion</i> sp.		●		○	○				
24		ヤンマ		ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>		●		○				
25		サナエトンボ		ダビドサナエ	<i>Davidius nanus</i>			●			○		
26		タイワンウチワヤンマ		<i>Ictinogomphus pertinax</i>			●			○			
27	オニヤンマ	オニヤンマ		<i>Anotogaster sieboldii</i>			●				○		
28		エゾトンボ		オオヤマトンボ	<i>Epophthalmia elegans</i>	●			○				
29		トンボ		ヨツボシトンボ	<i>Libellula quadrimaculata asahinai</i>			●	○				
30				シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>			●	○				
31			コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>	●		●	○					
32		カワゲラ (セキ翅)	オナシカワゲラ	オナシカワゲラ属	<i>Nemoura</i> sp.		●			○			
33	カワゲラ		トウゴウカワゲラ	<i>Togoperla limbata</i>			●			○			
34	カメムシ (半翅)		アメンボ	アメンボ	<i>Aquarius paludum paludum</i>	●		●	○	○			
35				エサキアメンボ	<i>Limnoporus esakii</i>								
36				ヒメアメンボ	<i>Gerris latiaabdominis</i>	●				○			
37				トガリアメンボ	<i>Rhagadotarsus kraepelini</i>			●		○			
-				アメンボ科	Gerridae sp.			●		○	○		
38	ミズムシ (昆)		オオミズムシ	Hesperocorixa kolthoffi		●							
39			マツモムシ	コマツモムシ	<i>Anisops ogasawarensis</i>			●	○	○			
40			マツモムシ	<i>Notonecta triguttata</i>			●	○					
41		マルミズムシ	Paraplea japonica			●	○	○					
42	ヘビトンボ	ヤマトクロスジヘビトンボ	<i>Parachauliodes japonicus</i>			●	○	○	○				
43	トビケラ (毛翅)	ムネカクトビケラ	ムネカクトビケラ属	<i>Ecnomus</i> sp.			●		○				
44		カクツツトビケラ	カクツツトビケラ属	<i>Lepidostoma</i> sp.		●	●		○	○			
-		-	トビケラ目	TRICHOPTERA			●	○					
45	ハエ (双翅)	ケヨソイカ	ケヨソイカ科	Chaoboridae sp.			●	○	○	○			
46		ユスリカ	ダンダラヒメユスリカ属	<i>Ablabesmyia</i> sp.		●		○					
47		ユスリカ属	ユスリカ属	<i>Chironomus</i> sp.		●	●	○	○	○			
48			トラフユスリカ属	<i>Conchapelopia</i> sp.		●		○	○				
49			ツヤユスリカ属	<i>Cricotopus</i> sp.		●		○	○				
50			カマガタユスリカ属	<i>Cryptochironomus</i> sp.		●		○	○				
51			ホソミユスリカ属	<i>Dicrotendipes</i> sp.		●		○					
52			セボリユスリカ属	<i>Glyptotendipes</i> sp.		●	●	○	○				
53			エリユスリカ属	<i>Orthocladius</i> sp.		●		○	○				
54			ハモンユスリカ属	<i>Polypedilum</i> sp.		●		○	○				
55			アカムシユスリカ	<i>Prosilocerus akamusi</i>		●	●		○				
56			ナガレツヤユスリカ属	<i>Rheocricotopus</i> sp.		●		○					
57			ハムグリユスリカ属	<i>Stenochironomus</i> sp.		●		○					
58			アシマダユスリカ属	<i>Stictochironomus</i> sp.		●		○					
59			ヒゲユスリカ属	<i>Tanytarsus</i> sp.		●		○	○	○			
60			モンユスリカ亜科	Tanyptodinae sp.			●	●	○	○	○		
-			ユスリカ科	Chironomidae sp.		●	●	○	○				
61			コウチュウ (鞘翅)	ゲンゴロウ	チビゲンゴロウ	<i>Hydroglyphus japonicus</i>			●	○			
62		オニギリマルケシゲンゴロウ		<i>Hydrovatus onigiri</i>			●			○			
63		ナガマルチビゲンゴロウ		<i>Leiodytes kvushuensis</i>			●	○					
64		モンキマゲンゴロウ		<i>Platambus pictipennis</i>			●			○			
65	ガムシ	オガタツヤヒラタガムシ		<i>Agraphydrus ogatai</i>			●			○			
66		スジヒラタガムシ	<i>Helochaeres nipponicus</i>										
67		コモンシジミガムシ	<i>Laccobius oscillans</i>			●		○					
68	苔虫動物	被喉	ハネコケムシ	オオマリコケムシ	オオマリコケムシ (休芽)	<i>Pectinatella magnifica</i>			●	○			
合計	5門	7綱	18目	35科		68種	8種	27種	47種	48種	33種	15種	

注:1) 分類・種名及び種の配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト令和4年度生物リスト」(国土交通省、令和4年)に従った。秋季は魚類調査時に確認。

2) No.における「-」は、種数としてカウントしないことを示す。種まで同定できず「○属」や「○科」としたもののについては、同じ属や同じ科の他の生物種が確認されている場合、種数には含めない。

3) 重要種等の状況

(1) 重要な種

重要な動物の選定にあたっては、最新の法律や資料により判断するものとし、表 9.7.1-28 に示した選定基準を用いた。現地調査で確認された重要な種は表 9.7.1-29 に示すとおりである。なお、サンショウクイについては、目視観察により亜種リュウキュウサンショウクイであることを確認したことから重要な種には含めなかった。

表 9.7.1-28 重要な動物種の選定基準

略称	選定基準	記号	選定基準となる区分
天然 記念物	「文化財保護法」（昭和 25 年、法律第 214 号）	国特別	国指定特別天然記念物
		国指定	国指定天然記念物
	「福岡県文化財保護条例」（昭和 30 年、条例第 25 号）	県指定	福岡県指定天然記念物
	「福岡市文化財保護条例」（昭和 48 年、条例第 33 号）	市指定	福岡市指定天然記念物
種の 保存法	「絶滅のおそれある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年、法律第 75 号）	国内	国内希少野生動植物種
		国際	国際希少野生動植物種
		緊急	緊急指定種
環境省 RL	「環境省レッドリスト 2020」（令和 2 年、環境省）	EX	絶滅
		EW	野生絶滅
		CR+EN	絶滅危惧Ⅰ類
		CR	絶滅危惧ⅠA類
		EN	絶滅危惧ⅠB類
		VU	絶滅危惧Ⅱ類
		NT	準絶滅危惧
		DD	情報不足
福岡県 RDB	「福岡県の希少野生生物-福岡県レッドデータブック 2011 植物群落・植物・哺乳類・鳥類-」（平成 23 年、福岡県） 「福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック 2014-爬虫類/両生類/魚類/昆虫類/貝類/甲殻類その他/クモ形類等-」（平成 26 年、福岡県）	EX	絶滅
		EW	野生絶滅
		CR	絶滅危惧ⅠA類
		EN	絶滅危惧ⅠB類
		VU	絶滅危惧Ⅱ類
		NT	準絶滅危惧
		DD	情報不足
		LP	絶滅のおそれのある地域個体群
福岡県希少種保護条例	「福岡県希少野生動植物種の保護に関する条例」（令和 2 年、条例第 42 号）	指定	福岡県指定希少野生動植物種
福岡市配慮指針	「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成 28 年改定、福岡市）	掲載	福岡市内の貴重・希少生物等のリスト掲載種

表 9.7.1-29 現地調査により確認された重要な種

No.	分類群	種名	改変区域		選定基準					
			内	外	天然記念物	種の保存法	環境省 R L	R 福岡県 D B	福岡県希少種保護条例	福岡市配慮指針
1	ほ乳類	ニホンザル	○					NT		掲載
2		キツネ	○	○				NT		掲載
3	鳥類 (一般鳥類)	ヤマドリ		○				VU		掲載
4		アオバト	○	○						掲載
5		コシアカツバメ	○	○				NT		掲載
6		コサメビタキ	○	○				DD		掲載
7		キビタキ		○						掲載
8		ミサゴ	○	○			NT			掲載
9		ハチクマ		○			NT	NT		掲載
10	鳥類 (猛禽類)	ツミ		○				VU		掲載
11		ハイタカ	○	○			NT			掲載
12		オオタカ		○			NT	NT		掲載
13		サシバ		○			VU	NT		掲載
14		ノスリ		○				NT		掲載
15		ハヤブサ	○	○		国内	VU	VU		掲載
16	両生類	ニホンアカガエル		○				VU		掲載
17	魚類	オオキンブナ		○				DD		掲載
18		ミナミメダカ		○			VU	NT		掲載
19	昆虫類	ベニイトトンボ		○			NT			掲載
20		オオミノガ		○				VU		掲載
21		マイマイカブリ		○				NT		掲載
22		ナガマルチビゲンゴロウ		○				EN		
23		ヤマトアシナガバチ		○			DD			掲載
24	底生動物	ナガオカモノアラガイ		○			NT	VU		掲載
25		エサキアメンボ		○			NT	VU		掲載
26		オオミズムシ		○			NT	VU		掲載
27		スジヒラタガムシ		○			NT			
合計	-	27種	8種	26種	0種	1種	13種	20種	0種	25種

注：1) 一般鳥類調査で確認されたミサゴ、ツミ、ハイタカ、サシバ、ハヤブサは猛禽類に、昆虫類調査及び底生動物調査で確認されたナガマルチビゲンゴロウは昆虫類に含めた。

2) 重要な種の選定基準は以下のとおりとした。

天然記念物

国特別：国指定特別天然記念物、国指定：国指定天然記念物、

県指定：福岡県指定天然記念物、市指定：福岡市指定天然記念物

種の保存法

国内：国内希少野生動植物種、国際：国際希少野生動植物種、

緊急：緊急指定種

環境省RL

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類、CR：絶滅危惧ⅠA類、

EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、

DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

福岡県RDB

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、

VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、

LP：絶滅のおそれのある地域個体群

福岡県希少種保護条例

指定：福岡県指定希少野生動植物種

福岡市配慮指針

掲載：福岡市内の貴重・希少生物等のリスト掲載種

(2) ほ乳類

ほ乳類では、重要な種としてニホンザルとキツネの2種が確認された。各種の確認位置を図9.7.1-4に示す。

・ニホンザル

〔形態・生態・県内分布等〕

日本固有種である。本種はホンドザル *M. f. fuscata* とヤクシマザル *M. f. yakui* (屋久島のみ) に生息) の2亜種に区分される。体色は茶褐色ないし灰褐色で、腹と手足の内側がやや白い。顔と尻は裸出して赤い。下北半島、伊豆大島、神奈川県等で野生化しているタイワンザルは、本種に比べて尾がはるかに長い。広葉樹林に生息し、成体雄をリーダーとする十数頭から百数十頭の群れで遊動生活する。雑食性で、果実、種子、葉、芽、昆虫類等を採食し、農林作物を食害することもある。

福岡県内の山地に広く分布するが、群れは香春岳周辺と脊振山地のみに局限される。2008年の福岡県と香春町の資料によれば、香春岳周辺では2群160頭が確認され、脊振山地では約200頭と推定されており、県内での群れの個体数は少ない。2008年の目撃情報では、島嶼および柳川市、筑後市、大川市、小郡市、福津市、志免町、粕屋町、桂川町、糸島市(旧志摩町)、大木町、広川町、吉富町では確認されていない。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・キツネ

〔形態・生態・県内分布等〕

日本に分布するキツネはアカギツネの亜種である。アカギツネはユーラシア大陸のほぼ全域と北アメリカに広く分布している。体は長く、鼻面は細くとがり、耳は三角形で大きい。毛色はふつう赤褐色や褐色などで、胸や腹部は白っぽい。縄張り内で単独で生活し、昼夜共に活動するが、主に早朝と夕方に活発に行動する。縄張りの広さは、食料事情や地域に生息する個体数などによっても異なるが市街地近郊などに生息するものは 1km² 以下とも言われている。ネズミやノウサギ、モグラなどの小動物や昆虫類、ミミズなどを食べるが、雑食性で果実や鳥や鳥の卵など、様々なもの食べる。また、獲物は決った道を通って探すと言われているが、ニワトリや家畜のウサギなどを襲うこともある。

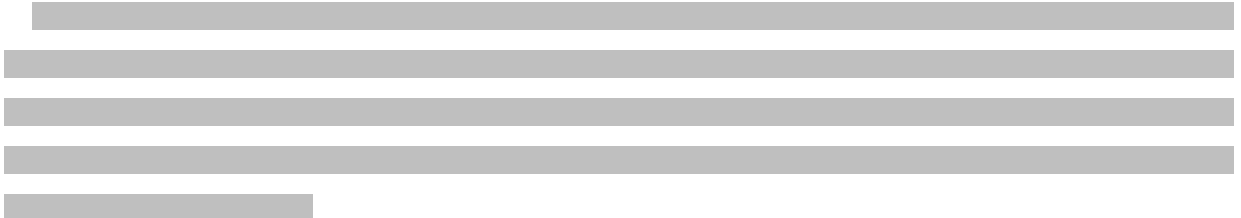
福岡県内の平野から丘陵帯、山地にかけて広く分布するが個体数は少ない。生息数についての調査は行われていないが、生息情報は減少傾向にある。2000 年以降では、桂川町、みやこ町、北九州市に生息情報がある。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「日本のほ乳類」(2005 年、阿部永・伊藤徹魯、前田喜四雄)

「動物図鑑」(<https://pz-garden.stardust31.com/syokuniku-moku/inu-;ka/kitune>)

〔現地調査結果〕



重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

確認位置

-  : 春季
-  : 夏季
-  : 秋季
-  : 冬季

注：種名とともに表示された数字は確認数を示す。



S = 1:7,500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-4 ほ乳類の重要な種の
確認位置図

(3) 鳥類（一般鳥類）

鳥類（一般鳥類）では、5種の重要な種が確認された（猛禽類を除く）。各種の確認位置を図9.7.1-5に示す。

・ヤマドリ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄 125cm、雌 55cm。日本固有種で、本州、四国、九州に分布し、4亜種に分類される。福岡県に生息するのは北部九州に分布する亜種アカヤマドリ。山地の樹林に生息し、植物の種子や芽、実、昆虫類等を食べる。

福岡県内では留鳥として分布する。生息状況はよくわかっていないが、生息密度は低い。北九州市、直方市、嘉麻市、飯塚市、添田町、宗像市、福岡市等で確認があるほか、県南の山地にも生息していると思われる。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・アオバト

〔形態・生態・県内分布等〕

全長 33cm。雄成鳥は頭部から喉、胸にかけては黄緑色で、後頸から背、腰、尾までは緑灰色。雌成鳥は雄に似るが、東部から胸、背はより濃い緑褐色で黄色みに乏しい。嘴はコバルトブルーで、先端はやや淡い。虹彩は内側が青く、外側が赤紫で二重になっている。主に木の実や新芽を樹上で食べる。

留鳥または漂鳥として、北海道から九州の丘陵地から山地の森林で繁殖する。群れで行動することが多く、初夏から秋にかけて海岸に群れをなして海水を飲みに来る習性がある。福岡市内では確認されることが少なくなったとされる。

出典：「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）

「新版日本の野鳥」（平成 26 年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄）

「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成 28 年改定、福岡市）

〔現地調査結果〕

・コシアカツバメ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長 19cm。ツバメより大きい。雌雄ほぼ同色。成鳥は額から体上面は紺色光沢のある黒色。眼先から頬、腮以下の体下面は淡褐色で、黒褐色の細い縦斑が密にある。繁殖期以外は群れで生活することが多い。一定の場所で羽ばたきと滑翔を交えて飛んでいる昆虫類を採食する。人家やビル等の軒下に、泥やわらで徳利型の巣を造る。

福岡県内全域に飛来するが、都市部ではほとんど繁殖は見られず、比較的郊外で繁殖が見られる。また一部は渡りの時期に通過する。夏鳥として飛来し、主に団地、学校、病院等の比較的大型の建物や橋梁において繁殖していたが、近年繁殖場所が減少し、個体数も減少している。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」(平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸)

「新版日本の野鳥」(平成 26 年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄)

〔現地調査結果〕

・コサメビタキ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長 13cm。雌雄同色。成鳥は頭部から体上面は灰褐色。翼、尾は暗灰褐色で、雨覆、風切の羽縁は白色。アイリングは白い。目先が白っぽくなる傾向がある。腮以下の体下面は淡灰褐色で、白っぽく見える。嘴は黒褐色で、下嘴は黄褐色。見通しのよい枝に垂直にとまり、飛んでいる昆虫類を空中採食し、再び同じ枝にとまる。

福岡県内では秋の渡りの時期には市街地の公園や山地の比較的开けた山道等の人目につきやすい場所で観察される。しかし、繁殖期の生息情報が少なく、県内にどの程度繁殖個体が生息しているのか、はっきりとしない。明るい落葉広葉樹林や針広混交林に生息するが、その数は少ないと思われる。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」(平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸)

「新版日本の野鳥」(平成 26 年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄)

〔現地調査結果〕

・キビタキ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長 13.5cm。雄は上面が黒、眉斑・下面・腰は黄色。翼に白の斑点がある。雌は上面・脇はオリーブ褐色、脇から腹にかけて淡い色になり腹部は白に近い。林内の枝に垂直にとまり、あまり活発には動かず、葉や枝にいる昆虫類、クモ類等を採食し、時々空中に飛び立って空中採食もする。

島嶼（国後島も含む）を含むほぼ日本全国で繁殖する。福岡県内では一般的な夏鳥として主に丘陵地や山地の広葉樹林で見ることができる。観察記録は4～6月に集中するが、これは繁殖期によく通る声でさえずり、容易に確認できるためである。丘陵地から山地にかけて生息するが、標高の高い所では少ない。10月頃渡去するが遅い年には11月の確認記録もある。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「新版日本の野鳥」（平成26年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄）

〔現地調査結果〕

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

- | とまり | 飛翔 | |
|---|---|-------|
|  |  | : 春季 |
|  |  | : 初夏季 |
|  |  | : 夏季 |
|  |  | : 秋季 |
|  |  | : 冬季 |

注：種名とともに表示された数字は確認数を示す。



S = 1:7,500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-5 鳥類の重要な種の確認
位置図（猛禽類を除く）

(4) 鳥類（猛禽類）

鳥類（猛禽類）では、8種の重要な種が確認された。確認位置を図 9.7.1-6 から図 9.7.1-18 に示す。

・ミサゴ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 56cm～雌 61.5cm。翼開張雄約 147cm～雌約 168.5cm。飛翔時の下面は白く胸部に褐色の帯が目立つ。海岸、河口、湖沼、池、河川等に生息する魚食性のタカ。水面上で停空飛行し、水中に足から飛び込んで魚類をとる。海岸の岩棚、切り立った岩の上、河川の崖、山林の大木の枝上等に巣を造って繁殖し、毎年同じ巣を利用する。

東日本で夏を過ごしたものは、秋に西日本へ移動してくる。福岡県内の海岸部のほぼ全域に周年生息し冬季は個体数が増える。北九州市曾根干潟では 1994 年に、沖の定置網の竹竿にとまっている 12 羽を同時に記録した。福岡市瑞梅寺川河口でも、同時に 19 羽が記録されたことがある。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「新版日本の野鳥」（平成 26 年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄）

〔現地調査結果〕



・ハチクマ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 57cm～雌約 60.5cm。翼開張 121～135cm。トビと同大かやや小さい。雌雄ほぼ同色だが、羽衣は様々あり、個体変異が多い。雌雄に関係なく、体上面は黒褐色か褐色が普通。体下面と下雨覆の羽色は白色の淡色型から黒褐色の暗色型がある。名前のとおりハチ類の幼虫が餌で、クロスズメバチ（ジバチ）の巣を地中から足と嘴で掘り出す。

日本に4月中旬～5月中旬にかけて渡来し繁殖する。繁殖期には長い翼を上には伸ばして急降下し、羽ばたいて急上昇するディスプレイ飛行を行う。9月中旬～10月初めにかけて東から西へ移動する群れが各地で見られる。福岡県は秋の渡りのメインルートに位置しており、ルート上では多数のハチクマが観察される。秋の渡りルート・時期は把握されているが、春の渡りについては十分解明されていない。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）

〔現地調査結果〕

・ツミ

〔形態・生態・県内分布等〕

小型のタカ類で、全長雄 27cm、雌 30cm。東アジアで繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では全国的に繁殖し、多くは冬、南へ渡ると考えられている。平地から山地の樹林地で繁殖するが、市街地の街路樹で繁殖することもある。マツやスギ等の横枝に巣を作る。1 巣卵数は 3～5 個。主に小鳥類を捕食する。

福岡県内には夏鳥として渡来すると思われるが、生息状況はよくわかっていない。生息数は少ないと考えられる。嘉麻市、川崎町、添田町等で 2000 年以降繁殖期の記録がある。春秋の渡り時期には、県内各地で記録される。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・ハイタカ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 30cm～雌約 40cm。翼開張雄約 60.5cm～雌約 79cm。雄成鳥は上面が暗青灰色で胸から腹にかけてオレンジ色の横縞がある。雌成鳥は上面が雄成鳥より褐色を帯び、胸から腹にかけて黒灰色の横縞がある。飛んでいるとき、翼はやや幅広く、尾は長く見える。移動するときは、羽ばたきと滑翔を繰り返して直線的に飛ぶ。高い木の上や枝先にとまり、獲物を見つけると飛び立って足の爪で小鳥類や小形獣類を捕獲する。国内の繁殖地では、留鳥であるものも多いが、冬季に餌の少なくなる地域のは平地や農耕地へ移動したり、より南下しているものと思われる。

北海道と本州で繁殖しているが、四国、九州でも繁殖の可能性はある。福岡県内で 9 月～4 月にかけて冬季の記録が多い。また秋と春の渡りの時期に特によく見られる。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・オオタカ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 47cm～雌約 59cm。翼開張雄約 106cm～雌約 131cm。山地から平地の林に生息するが、農耕地や水辺等の開けた場所に出て獲物を探すこともある。開けた所を飛ぶときは、羽ばたきに滑翔を交えて直線的に飛ぶ。鳥では、主にツグミ大の小鳥から大形のキジ類まで捕食する。ノウサギ、リス等のほ乳類も捕食する。年に 1 回繁殖し、針葉樹、特にアカマツ等の大木の枝上に枯枝を積んで皿形の巣をつくる。

福岡県内では 10 月、11 月、および 3 月に記録が多く冬鳥とされていたが、2004 年に宗像市で繁殖が確認された。また、県内各地で繁殖期の観察例が増えており、生息数は増加している。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・サシバ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 47～雌約 51cm。翼開張 102.5～115cm。ハシボソガラスほどの大きさで、赤褐色のタカである。飛んでいる時、翼は細長く、翼端はとがって見える。低山の森林で繁殖し、周辺の開けた水田等で採餌する。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫類をはじめ、ネズミや小鳥類を捕食することもある。3月末から4月中旬にかけて東南アジア方面から渡ってきて繁殖する。繁殖期には急降下と急上昇を繰り返す波状飛行や、「キンミー」と鳴きながら帆翔する等のディスプレイが見られる。

福岡県内には夏鳥として飛来し、全域の丘陵地や山地で繁殖する。春と秋には渡りの個体も多数通過するものと思われる。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

[Redacted text block]

・ノスリ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 50～雌約 60cm。翼開張 122～137cm。カラスと同大かやや大きい。雌雄ほぼ同色。頭頂から背以下の体上面は黒褐色で、淡褐色の羽縁や斑がある。平地から山地の河川敷の林、果樹園、農耕地、森林等で繁殖し、冬季は干拓地や農耕地、湖沼、河川等の疎林から林に生息。ネズミ類を中心に、鳥類、両生類、は虫類等も捕食する。

福岡県内には冬鳥として渡来し、山間部や丘陵地で見られるが、個体数は多くない。春と秋には渡りの個体も通過する。北九州市平尾台では比較的個体数が多い。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」(平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸)

〔現地調査結果〕

[Redacted text block]

・ハヤブサ

〔形態・生態・県内分布等〕

全長雄約 38～雌約 51cm。翼開張雄 84～雌 120cm。ハシボソガラスよりもやや小さい。雌雄同色。成鳥は額から体上面は青黒色で、頭部は黒味が強い。眼から頬にはひげ上の黒斑がある。腮からの体下面は白く、胸から腹に黒褐色の斑がある。平地から山地の海岸、河口、河川、湖沼、農耕地等に生息し、海岸や山地の断崖や岸壁の岩棚や横穴等で繁殖する。近年、市街地のビルの窓辺や、鉄塔の鉄骨の横組の隙間等に営巣することもある。主に飛行している鳥類を足で蹴って仕留めたり、水面等に叩きつけて捕獲する。

福岡県内では留鳥として、曽根、響灘埋立地、今津ではほぼ1年中確認される。また頓田貯水池等では、冬季に少数の観察記録がある。毎年4月にヒヨドリの渡りに合わせるように、複数の個体が部埼に出現する。繁殖は海岸や島の断崖の岩棚等で行うことが多い。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」(平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸)

〔現地調査結果〕

[Redacted content]

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

とまり 飛行

- → : 雄成鳥
- → : 雌成鳥
- → : 性不明成鳥
- → : 性齢不明



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-6 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ミサゴ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

- | とまり | 飛翔 | |
|---|---|---------|
|  |  | : 雄成鳥 |
|  |  | : 雌成鳥 |
|  |  | : 性不明成鳥 |
|  |  | : 性齢不明 |



S = 1:25,000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-7 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ミサゴ 令和5年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

とまり 飛行

- → : 雄成鳥
- → : 雌成鳥
- → : 性不明成鳥
- → : 性齢不明



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-8 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ハチクマ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

- | とまり | 飛翔 | |
|---|---|---------|
|  |  | : 雄成鳥 |
|  |  | : 雌成鳥 |
|  |  | : 性不明成鳥 |
|  |  | : 性齢不明 |



S = 1:25,000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-9 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ハチクマ 令和5年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

とまり 飛行

- ➡ : 雄成鳥
- ➡ : 雌成鳥
- ➡ : 性不明成鳥
- ➡ : 性齢不明



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

『電子地形図25000（国土地理院）』を加工して作成

図 9.7.1-10 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ツミ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

- | とまり | 飛翔 | |
|---|---|---------|
|  |  | : 雄成鳥 |
|  |  | : 雌成鳥 |
|  |  | : 性不明成鳥 |
|  |  | : 性齢不明 |



S = 1:25,000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-11 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ハイタカ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

とまり 飛行

- → : 雄成鳥
- → : 雌成鳥
- → : 性不明成鳥
- → : 性齢不明



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-12 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ハイタカ 令和5年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

- | とまり | 飛翔 | |
|---|---|---------|
|  |  | : 雄成鳥 |
|  |  | : 雌成鳥 |
|  |  | : 性不明成鳥 |
|  |  | : 性齢不明 |



S = 1:25,000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-13 猛禽類の重要な種の確認
位置図（オオタカ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

とまり 飛行

- → : 雄成鳥
- → : 雌成鳥
- → : 性不明成鳥
- → : 性齢不明



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-14 猛禽類の重要な種の確認
位置図（サシバ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

- | とまり | 飛翔 | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|---------|
| ● | → | : 雄成鳥 |
| ● | → | : 雌成鳥 |
| ● | → | : 性不明成鳥 |
| ● | → | : 性齢不明 |



S = 1:25,000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-15 猛禽類の重要な種の確認
位置図（サシバ 令和5年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

- | とまり | 飛行 | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|---------|
| ● | → | : 雄成鳥 |
| ● | → | : 雌成鳥 |
| ● | → | : 性不明成鳥 |
| ● | → | : 性齢不明 |



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-16 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ノスリ 令和5年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

- | とまり | 飛行 | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|---------|
| ● | → | : 雄成鳥 |
| ● | → | : 雌成鳥 |
| ● | → | : 性不明成鳥 |
| ● | → | : 性齢不明 |



S = 1:25, 000



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9. 7. 1-17 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ハヤブサ 令和4年）

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

- : 改変区域
- : 対象事業実施区域
- : 調査範囲

とまり 飛行

- → : 雄成鳥
- → : 雌成鳥
- → : 性不明成鳥
- → : 性齢不明



S = 1:25,000

0 250 500 1000m

「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-18 猛禽類の重要な種の確認
位置図（ハヤブサ 令和5年）

(5) 両生類

両生類では、重要な種としてニホンアカガエル 1 種が確認された。確認位置を図 9.7.1-19 に示す。

・ニホンアカガエル

〔形態・生態・県内分布等〕

赤褐色のスマートなカエルで、体長 6 cm 前後。背面は赤褐色、黄褐色、暗褐色で、眼の後縁から鼓膜をとおり前肢基部にかけて平行四辺形状の大きな黒斑がある。背面の左右に淡色の細い隆条がほぼ平行して走る。雄の腹面は白色、雌の腹面は橙色または橙色と黄色のまだら模様。森林内で生活し、早春に林縁部の溝や湿地に産卵する。卵塊は大型で、幼生は 5、6 月に変態して上陸する。日本固有種。

福岡県内では、北九州市、福岡市、大牟田市、直方市、飯塚市、行橋市、宗像市、古賀市、福津市、宮若市、糸島市、那珂川町、荏田町、みやこ町等に分布。県東部にはヤマアカガエルと共存している場所がある。通常、標高の低い山地、丘陵地が耕地と接する場所に産卵するが、主として産卵場所の悪化、消失により、個体数は減少している。最近では轍跡等の一時的な水溜りに産卵する例が多く、その場所は年ごとに変動し、極めて不安定である。また、一時的な水溜りでは乾燥死する卵塊や幼生がしばしばみられる。安定した産卵場所の多くは、人為的に造成されたビオトープや公園の池である。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕



重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

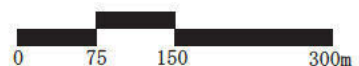
確認位置

-  : 早春季
-  : 春季
-  : 夏季
-  : 秋季
-  : 冬季

注：種名とともに表示された数字は確認数を示す。



S = 1:7,500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-19 両性類の重要な種の確認
位置図

(6) 魚類

魚類では、重要な種としてオオキンブナとミナミメダカの2種が確認された。確認位置を図9.7.1-20に示す。

・オオキンブナ

〔形態・生態・県内分布など〕

背びれ、尻びれの前縁には強い棘があり、その後縁には鋸歯がある。ギンブナと比べると体高が小さく、背びれの条数や鰓耙数が少ない。西日本を中心に见られる。東日本を中心にみられるキンブナが全長15cm程度と小型であるのに対し、本種は全長が約30cmで、これを超えるものも見られる。生活場所は河川の中流・下流域から池沼、湿地帯、農業用水路と幅広い。雑食性。3月～6月に抽水植物帯で産卵する。

中部地方以西の本州、四国、九州に分布する。福岡県内では山国川、大根川、那珂川、筑後川、矢部川の各水系に分布する。県内にはオオキンブナと同定される2倍体の在来フナ類が自然分布することは確実と思われるが、詳細な形態学的・遺伝学的調査がなされておらず実態は不明。ただし、本種と同定される個体が採集されることはかなり少なく、減少している可能性が高い。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「改訂版日本の淡水魚 山溪カラー名鑑」(谷口順彦 1989「オオキンブナ」、川那辺浩哉ほか(編)1989、株式会社山と溪谷社、pp.342-343)

「増補改訂日本の淡水魚 山溪ハンディ図鑑 15」(藤田朝彦「オオキンブナ」、細谷和海(編)2019、株式会社山と溪谷社、pp.56)

〔現地調査結果〕



・ミナミメダカ

〔形態・生態・県内分布など〕

体長は3 cm 程度。体は細長く、口は上を向く。胸びれは高い位置にあり、背びれは後方についている。雄は背びれに切れ込みがあり、尻びれが大きく長方形になる。農業水路などの流れの緩やかで、水生植物が豊かな場所に生息する。浅い水域を好み、表層を群泳する。繁殖期は4～8月で、雌はしばらく腹に卵を付けたまま泳ぎ、その後水草などに産み付ける。

日本海側では京都府以西、太平洋側では岩手県以西の本州、四国、九州、琉球列島、隠岐や壱岐、対馬などの島嶼にも分布する。県内では全域に分布し、河川の中流・下流域の植生が豊富なワンド環境やそれに連なる農業用水路、山間のため池などに生息する。特定外来生物カダヤシの侵入や、農業用水路の三面コンクリート化により個体数が減少している地域が多い。近年、メダカは分類学的に再検討が行われ、ミナミメダカとキタノメダカの2種に区別された。九州に自然分布するものはミナミメダカである。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「レッドデータブック 2014<汽水・淡水魚類>」(細谷和海「メダカ南日本集団」、環境省(編)2015、株式会社ぎょうせい、pp.296-297)

「増補改訂日本の淡水魚 山溪ハンディ図鑑 15」(川瀬成吾「ミナミメダカ」、細谷和海(編)2019、株式会社山と溪谷社、pp.326-329)

〔現地調査結果〕

[Redacted content]

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

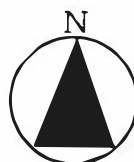
凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

確認位置

-  : 早春季
-  : 春季
-  : 夏季
-  : 秋季

注：種名とともに表示された数字は確認数を示す。



S = 1 : 7, 500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9. 7. 1-20 魚類の重要な種の
確認位置図

(7) 昆虫類

昆虫類では、5 種の重要な種が確認された。確認位置を図 9.7.1-21 に示す。

・ベニイトトンボ

〔形態・生態・県内分布等〕

腹長 30mm 前後の朱色のイトトンボ。国内では関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。成虫は 6～10 月に発生する。おもに平地から丘陵地の植生が豊富なため池に生息する。生息地の埋立て、水質汚濁、農薬汚染、外来種の影響などで減少している。一方、最近になって生息地の発見も相次いでおり、放虫等人為的な分布の可能性が示唆されている。

出典：「レッドデータブック 2014 日本の絶滅の恐れのある野生生物 昆虫類 5」（2015 年、環境省）

〔現地調査結果〕

・オオミノガ

〔形態・生態・県内分布等〕

国内では本州、四国、九州、沖縄に分布する。福岡県では山手にはあまり見られず市街地に分布する。そのため侵入昆虫として考えられている。市街地の街路樹の害虫としてその被害がしばしば問題になるような昆虫であったが、近年ヤドリバエの一種による寄生のため全国的にほぼ壊滅状態となった。成虫は雄が有翅、雌は無翅で脱皮後も蛹の殻の中に幼虫のような特殊な形態でとどまっている。孵化した幼虫はいわゆる「ミノムシ」として葉を食べ、極めて多食性である。しばしばプラタナスなどの街路樹の被害が報告されている。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・マイマイカブリ

〔形態・生態・県内分布等〕

体長 30～70mm 程のオサムシ科の甲虫。日本固有種で北海道、本州、四国、九州に広く分布し、各地で亜種化している。福岡県では、かつては平地～山地まで広く分布し、都市近郊の公園、里山、畑地等でも普通に見られた種である。都市化や餌生物の大型陸産貝類の減少で大きく個体数を減らしている。山地や河川において減少は小さい。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・ナガマルチビゲンゴロウ

〔形態・生態・県内分布など〕

体長約 1.5～1.8mm。背面は黄褐色で黒い斑紋がある。上翅は黄白色で、4～5対の不規則な黒褐色の斑紋がある。会合部と基部も黒褐色。体型は細長い。平地の止水域を好む。水生植物が一切ない、砂礫底のごく浅い環境でしばしば採集される一方、冬季に枯れた植物の間から多く得られた例もあり、好適な生息環境には不明な点が多い。

近畿地方以西の本州、九州に分布する。福岡県内では朝倉市、北九州市に分布する。福岡県内の分布は極めて局地的であり、個体数も少ない。また、全国的にも少ない種類である。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」(中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp.49)

〔現地調査結果〕

・ヤマトアシナガバチ

〔形態・生態・県内分布等〕

体長は女王で18 mm、働き蜂で15～17 mm程度のアシナガバチ。国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。草本の葉裏や樹木の細枝、時には人家の軒下、壁にも営巣する。平地から低山地に生息し、関東地方を中心に全国的に減少している。

出典：「レッドデータブック 2014 日本の絶滅の恐れのある野生生物 昆虫類 5」（2015 年、環境省）

「愛媛県レッドデータブック 愛媛県の絶滅のおそれのある野生動物」

(<https://www.pref.ehime.jp/reddatabook2014/top.html>、愛媛県)

〔現地調査結果〕

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

確認位置

-  : 春季
-  : 夏季
-  : 秋季

注：ナガマルチビゲンゴロウについては、
底生動物調査時の確認も含む。

注：種名とともに表示された数字は確認数を示す。



S = 1:7,500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-21 昆虫類の重要な種の
確認位置図

(8) 底生動物

底生動物では、5種の重要な種が確認された。確認位置を図 9.7.1-22 に示す。ただし、ナガマルチビゲンゴロウについては、昆虫調査によっても確認されているため、昆虫の項において記載した。

・ナガオカモノアラガイ

〔形態・生態・県内分布など〕

殻長 12 mm 程度。体層は高く、膨らみはオカモノアラガイよりも弱い。北海道南西部から本州、四国、九州（福岡県、大分県、熊本県）に分布するが、九州では生息地が少ない。

福岡県内では北九州市小倉南区竹馬川、遠賀川水系、飯塚市山口川、福岡市宇美川、那珂川町、大刀洗町本郷、みやま市大根川、筑後地方河川に分布する。産地が限定的で、個体数も少ない。近年の河川や湿地の開発・汚染により、生息地、個体数ともに減少している。福岡市宇美川、大刀洗町本郷は、高橋・岡本（1969）による記録で、現状は明らかでない。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

〔現地調査結果〕

・エサキアメンボ

〔形態・生態・県内分布など〕

体長 8～10 mm。背面は褐色で、体側部は銀白色に輝く。触角は長く体長の半分程度で、第4節が最も長い。体型は細長く、両側は並行に近い。水面で生活し、水面上に落ちた小動物を捕食する。平野部の植物が豊富な止水域に生息し、開放水面にはあまり出てこない。

北海道、本州、四国、九州、対馬に分布するほか、朝鮮半島、中国にも分布する。福岡県内では上毛町、豊前市、北九州市若松区、小倉南区、福津市、古賀市、福岡市中央区、福岡市西区、久留米市、大牟田市に分布する。福岡市周辺では都市化、有明海周辺では水路改修により生息適地が消滅しており、生息地・生息数は減少傾向にあると考えられる。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」(中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp.276)

〔現地調査結果〕

福岡県内では上毛町、豊前市、北九州市若松区、小倉南区、福津市、古賀市、福岡市中央区、福岡市西区、久留米市、大牟田市に分布する。福岡市周辺では都市化、有明海周辺では水路改修により生息適地が消滅しており、生息地・生息数は減少傾向にあると考えられる。

・オオミズムシ

〔形態・生態・県内分布など〕

体長約 11 mm。背面は黄褐色で、眼間は黄色味が強い。前胸背に 10～11 本の黒色横帯、上翅に細かい黒色斑紋がある。近縁種とは体サイズや雄前脚の形状等で区別が可能。平野部の浅い泥底の止水域に生息するが、好適生息環境については不明な点が多い。泥底表面の微小な藻類を食べると考えられている。成虫で越冬する。

近畿地方以西の本州、四国、九州に分布するほか、朝鮮半島、中国、ロシア極東部にも分布する。福岡県内では上毛町、北九州市、宗像市、福津市、福岡市、糸島市に分布する。近年になって県東部から日本海側の各地でいくつかの生息地が発見されたが、生息地は良好な環境のため池に限られることから、引き続き注意する必要がある。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」(中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp.241)

〔現地調査結果〕

福岡県内では上毛町、豊前市、北九州市若松区、小倉南区、福津市、古賀市、福岡市中央区、福岡市西区、久留米市、大牟田市に分布する。福岡市周辺では都市化、有明海周辺では水路改修により生息適地が消滅しており、生息地・生息数は減少傾向にあると考えられる。

昆虫の項において記載した (p. 9. 7-71 参照)。

〔形態・生態・県内分布など〕

本州、四国、九州に分布するほか、朝鮮半島にも分布する。

〔現地調査結果〕

重要な種の生息・生育に関する情報については、
保護の観点から非公開としています。

凡例

-  : 改変区域
-  : 対象事業実施区域
-  : 調査範囲

確認位置

-  : 早春季
-  : 夏季
-  : 秋季

注：ナガマルチビゲンゴロウについては、
昆虫の項（図9.7.1-21）に記載した。
注：種名とともに表示された数字は確認数を示す。



S = 1:7,500



「電子地形図25000（国土地理院）」を加工して作成

図 9.7.1-22 底生動物の重要な種の
確認位置図

7.2 予測

1) 予測の基本的な手法

予測の基本的な手法を表 9.7.2-1 に示す。

表 9.7.2-1 動物に係る予測の基本的な手法

区分	影響要因	予 測 項 目	予測の基本的な手法
工事の実施による影響	建設工事の実施	重要な種及び注目すべき生息地への影響	重要な種及び注目すべき生息地についての分布又は生息環境の改変の程度を把握した上で、事例の引用又は解析による方法とした。

2) 予測地域

予測地域は、事業実施により想定される環境影響の範囲、並びに動物の行動圏及び生息環境の連続性を考慮し、

行動圏の広い猛禽類に対しては、

魚類及び底生動物に対しては、

3) 予測対象時期等

予測対象時期は、動物の生息の特性を踏まえ、環境影響を的確に把握できる時期とし、予測対象時期は建設工事により重要な種の生息地及び注目すべき生息地の環境の変化が最大となる時期とした。

4) 予測方法

(1) 工事の実施による影響

① 建設工事の実施

分布又は生息環境の変化の程度を把握したうえで、事例の引用又は解析による方法とした。

5) 予測対象種等

重要な種は、既存資料調査と現地調査により確認したが、予測地域に生息する動物の最新情報を把握した現地調査結果を優先することとし、現地調査で確認された重要な種を予測対象種とした。予測対象とする動物の重要種及び影響要因の選定を表 9.7.2-2 に示す。

なお、注目すべき生息地については、既存資料調査及び現地調査で確認されていないため、予測を行っていない。

表 9.7.2-2(1/2) 動物の予測対象種と事業による影響要因の関係

分類群	種名	影響要因の区分
		工事の実施
ほ乳類	ニホンザル	○ 直接改変、移動経路の分断
	キツネ	○ 直接改変、移動経路の分断
鳥類 (一般 鳥類)	ヤマドリ	○ 直接改変
	アオバト	○ 直接改変
	コシアカツバメ	○ 直接改変
	コサメビタキ	○ 直接改変
	キビタキ	○ 直接改変
鳥類 (猛禽 類)	ミサゴ	○ 直接改変
	ハチクマ	○ 直接改変
	ツミ	○ 直接改変
	ハイタカ	○ 直接改変
	オオタカ	○ 直接改変
	サシバ	○ 直接改変
	ノスリ	○ 直接改変
	ハヤブサ	○ 直接改変
両生類	ニホンアカガエル	○ 直接改変、移動経路の分断、 生息環境の質的改変

注：1) 「○」影響が及ぶ可能性があるもの。「－」影響が及ぶ可能性が無いもの。

2) 影響要因の区分の詳細は以下のとおりとした。

工事の実施：建設工事の実施、資材等運搬車両の走行

表 9.7.2-2(2/2) 動物の予測対象種と事業による影響要因の関係

分類群	種名	影響要因の区分
		工事の実施
魚類	オオキンブナ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
	ミナミメダカ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
昆虫類	ベニイトトンボ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
	オオミノガ	○ 直接改変
	マイマイカブリ	○ 直接改変、移動経路の分断
	ナガマルチビ ゲンゴロウ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
	ヤマトアシナガ バチ	○ 直接改変
底生 動物	ナガオカ モノアラガイ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
	エサキアメンボ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
	オオミズムシ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変
	スジヒラタ ガムシ	○ 直接改変、 生息環境の質的改変

注：1) 「○」影響が及ぶ可能性があるもの。「－」影響が及ぶ可能性が無いもの。

2) 影響要因の区分の詳細は以下のとおりとした。

工事の実施：建設工事の実施、資材等運搬車両の走行

6) 予測結果

(1) 工事の実施による影響

動物の重要種に対する影響予測結果の詳細について表 9.7.2-3 に示す。

表 9.7.2-3(1/27) 重要な動物の予測結果（ニホンザル）

項目		内容
名称		ニホンザル（サル目オナガザル科）
選定基準		福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		ホンダザル <i>M. f. fuscata</i> とヤクシマザル <i>M. f. yakui</i> （屋久島のみに生息）の 2 亜種に区分される。体色は茶褐色ないし灰褐色で、腹と手足の内側がやや白い。顔と尻は裸出して赤い。
分布		日本では本州、四国、九州で確認されており、福岡県では沿岸から山地にかけて広く分布する。生息場所は木登りが得意なため森林を主とするものの、樹木があれば人家周辺でもみられる。
生態	採餌	雑食性で、果実、種子、葉、芽、昆虫類等を採食し、農林作物を食害することもある。
	繁殖	交尾は 9 月～11 月に行われ、6 か月後の 3 月～5 月に 1 頭を出産する。雌は 3 年半、雄は 4 年半程で性成熟し、雌はそのまま群れの中に留まっているが、雄はやがて群れを離れて別の群れの中に入っていく。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、移動経路の分断）	
		工事の実施による生息環境への影響は軽微であると予測される。 移動経路に与える影響は軽微であると予測される 工事の実施が本種の生息に及ぼす影響は軽微であると予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「日本の哺乳類」(2005 年、阿部永・伊藤徹魯、前田喜四雄)

「動物図鑑」(<https://pz-garden.stardust31.com/reichou-moku/onagazaru-ka/nihonzaru.html>)

表 9.7.2-3(2/27) 重要な動物の予測結果 (キツネ)

項目		内容
名称		キツネ（ネコ目イヌ科）
選定基準		福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		体は長く、鼻面は細くとがり、耳は三角形で大きい。毛色はふつう赤褐色や褐色などで、胸や腹部は白っぽい。
分布		日本に分布するキツネはアカギツネの亜種である。アカギツネはユーラシア大陸のほぼ全域と北アメリカに広く分布している。福岡県内の平野から丘陵帯、山地にかけて広く分布するが個体数は少ない。生息数についての調査は行われていないが、生息情報は減少傾向にある。2000 年以降では、桂川町、みやこ町、北九州市に生息情報がある。
生態	採餌	ネズミやノウサギ、モグラなどの小動物や昆虫類、ミミズなどを食べるが、雑食性で果実や鳥や鳥の卵など、様々なものを食べる。また、獲物は決まった道を通して探すと言われているが、ニワトリや家畜のウサギなどを襲うこともある。
	繁殖	普段は単独で生活しているが、繁殖期には雄が雌のなわばりに入り、夫婦と子の家族で暮らす。交尾は 1 月～2 月に行われ 2 か月後の 3 月～4 月に 2～6 頭を出産する。成熟は約 1 年で、大きくなった子は 11 月ごろに親のなわばりから追い出され独立する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、移動経路の分断）	工事の実施による生息環境への影響は軽微であると予測される。 工事の実施により移動経路の分断による影響は軽微と予測される。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「日本の哺乳類」(2005年、阿部永・伊藤徹魯、前田喜四雄)

「動物図鑑」 (<https://pz-garden.stardust31.com/syokuniku-moku/inu-;ka/kitune.html>)

表 9.7.2-3(3/27) 重要な動物の予測結果（ヤマドリ）

項目		内容
名称	ヤマドリ（キジ目キジ科）	
選定基準	福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態	全長雄 125cm、雌 55cm。雄はほぼニワトリ大であるが、全長の半分以上になる非常に長い尾を持つ。全体に赤褐色であるが、頭から首にかけて最も濃く見え、眼のまわりには赤い皮膚が裸出している。雌はキジの雌と似るが、本種のほうが赤みのある褐色である。	
分布	日本固有種で、本州、四国、九州に分布し、4亜種に分類される。福岡県に生息するのは北部九州に分布する亜種アカヤマドリ。福岡県内では留鳥として分布する。生息状況はよくわかっていないが、生息密度は低い。北九州市、直方市、嘉麻市、飯塚市、添田町、宗像市、福岡市等で確認があるほか、県南の山地にも生息していると思われる。	
生態	採餌	山地の樹林に生息し、植物の種子や芽、実、昆虫類等を食べる。
	繁殖	林内の地上に巣を造る。巣は草むらや木の根元に窪みをつくり、小枝や針葉樹の枯葉等を使用する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。



（他地域参考写真）

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）
「日本産鳥類の巣と卵」（令和2年、内田博）

表 9.7.2-3(4/27) 重要な動物の予測結果 (アオバト)

項目		内容	
名称		アオバト（ハト目ハト科）	
選定基準		福岡市配慮指針（掲載種）	
形態		全長 33cm。雄成鳥は頭部から喉、胸にかけては黄緑色で、後頸から背、腰、尾までは緑灰色。雌成鳥は雄に似るが、東部から胸、背はより濃い緑褐色で黄色みに乏しい。嘴はコバルトブルーで、先端はやや淡い。虹彩は内側が青く、外側が赤紫で二重になっている。	
分布		留鳥または漂鳥として、北海道から九州の丘陵地から山地の森林に分布する。福岡市内では確認されることが少なくなったとされる。	
生態	採餌	主に木の実や新芽を樹上で食べる。群れで行動することが多く、初夏から秋にかけて海岸に群れをなして海水を飲みに来る習性がある。	
	繁殖	留鳥または漂鳥として、北海道から九州の丘陵地から山地の森林で繁殖する。	
予測地域における 確認状況			
予測 結果	工事の実施 （直接改変）		
		工事の実施による生息環境への影響は軽微であると予測される。	

出典：「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）

「新版日本の野鳥」(平成26年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄)

「福岡市環境配慮指針（改定版）」（平成 28 年改定、福岡市）

表 9.7.2-3(5/27) 重要な動物の予測結果（コシアカツバメ）

項目		内容
名称	コシアカツバメ（スズメ目ツバメ科）	
選定基準	福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態	全長 19cm。ツバメより大きい。雌雄ほぼ同色。成鳥は額から体上面は紺色光沢のある黒色。眼先から頬、腮以下の体下面は淡褐色で、黒褐色の細い縦斑が密にある。	
分布	福岡県内全域に飛来するが、都市部ではほとんど繁殖は見られず、比較的郊外で繁殖が見られる。また一部は渡りの時期に通過する。夏鳥として飛来し、主に団地、学校、病院等の比較的大型の建物や橋梁において繁殖していたが、近年繁殖場所が減少し、個体数も減少している。	
生態	採餌	一定の場所で羽ばたきと滑翔を交えて飛んでいる昆虫類を採食する。
	繁殖	人家やビル等の軒下に、泥やわらで徳利型の巣を造る。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	
		工事の実施による生息環境への影響は軽微であると予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）
「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）
「新版日本の野鳥」（平成 26 年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄）

表 9.7.2-3(6/27) 重要な動物の予測結果 (コサメビタキ)

項目		内容	
名称		コサメビタキ（スズメ目ヒタキ科）	
選定基準		福岡県 RDB（DD）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態		全長 13cm。雌雄同色。成鳥は頭部から体上面は灰褐色。翼、尾は暗灰褐色で、雨覆、風切の羽縁は白色。アイリングは白い。目先が白っぽくなる傾向がある。腮以下の体下面は淡灰褐色で、白っぽく見える。嘴は黒褐色で、下嘴は黄褐色。 	
分布		福岡県内では秋の渡りの時期には市街地の公園や山地の比較的開けた山道等の人目につきやすい場所で観察される。しかし、繁殖期の生息情報が少なく、県内にどの程度繁殖個体が生息しているのか、はっきりとしない。明るい落葉広葉樹林や針広混交林に生息するが、その数は少ないと思われる。	
生態	採餌	見通しのよい枝に垂直にとまり、飛んでいる昆虫類を空中採食し、再び同じ枝にとまる。	
	繁殖	明るい落葉広葉樹林や針広混交林に生息し、樹木に木のこぶのような巣を作る。	
予測地域における確認状況			
予測結果	工事の実施（直接改変）	工事の実施による生息環境への影響は軽微であると予測される。	

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）

「新版日本の野鳥」(平成26年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄)

表 9.7.2-3(7/27) 重要な動物の予測結果（キビタキ）

項目		内容
名称		キビタキ（スズメ目ヒタキ科）
選定基準		福岡市配慮指針（掲載種）
形態		全長 13.5cm。雄は上面が黒、眉斑・下面・腰は黄色。翼に白の斑点がある。雌は上面・脇はオリーブ褐色、脇から腹にかけて淡い色になり腹部は白に近い。
分布		島嶼（国後島も含む）を含むほぼ日本全国で繁殖する。福岡県内では一般的な夏鳥として主に丘陵地や山地の広葉樹林で見ることができる。観察記録は4～6月に集中するが、これは繁殖期によく通る声でさえずり、容易に確認できるためである。丘陵地から山地にかけて生息するが、標高の高い所では少ない。10月頃渡去するが遅い年には11月の記録もある。  （他地域参考写真）
生態	採餌	林内の枝に垂直にとまり、あまり活発には動かず、葉や枝にいる昆虫類、クモ類等を採食し、時々空中に飛び立って空中採食もする。
	繁殖	樹木の裂け目や浅い洞に営巣する。竹等で作った巣箱も利用する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）
「新版日本の野鳥」（平成26年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄）
「日本産鳥類の巣と卵」（令和2年、内田博）

表 9.7.2-3(8/27) 重要な動物の予測結果 (ミサゴ)

項目		内容	
名称		ミサゴ（タカ目ミサゴ科）	
選定基準		環境省 RL（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態		全長雄約 56cm～雌 61.5cm。翼開張雄約 147cm～雌約 168.5cm。飛翔時の下面は白く胸部に褐色の帯が目立つ。	
分布		海岸、河口、湖沼、池、河川等に生息する。東日本で夏を過ごしたものは、秋に西日本へ移動してくる。福岡県内の海岸部のほぼ全域に周年生息し冬季は個体数が増える。北九州市曾根干潟では1994年に、沖の定置網の竹竿にとまっている 12羽を同時に記録した。福岡市瑞梅寺川河口でも、同時に19羽が記録されたことがある。 	
生態	採餌	魚食性のタカ。水面上で停空飛行し、水中に足から飛び込んで魚類をとる。	
	繁殖	海岸の岩棚、切り立った岩の上、河川の崖、山林の大木の枝上等に巣を造って繁殖し、毎年同じ巣を利用する。	
予測地域における確認状況			
予測結果	工事の実施（直接改変）		
		工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。	

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)
「新版日本の野鳥」（平成 26 年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄）

表 9.7.2-3(9/27) 重要な動物の予測結果 (ハチクマ)

項目		内容
名称		ハチクマ（タカ目タカ科）
選定基準		環境省 RL（NT）、福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		全長雄約 57cm～雌約 60.5cm。翼開張 121cm～135cm。トビと同大かやや小さい。雌雄ほぼ同色だが、羽衣は様々あり、個体変異が多い。雌雄に関係なく、体上面は黒褐色か褐色が普通。体下面と下雨覆の羽色は白色の淡色型から黒褐色の暗色型がある。
分布		日本に 4 月中旬～5 月中旬にかけて渡来し繁殖する。繁殖期には長い翼を上 に伸ばして急降下し、羽ばたいて急上昇するディスプレイ飛行を行う。9 月中旬～10 月初めにかけて東から西へ移動する群れが各地で見られる。福岡県は秋の渡りのメインルートに位置しており、ルート上では多数のハチクマが観察される。秋の渡りルート・時期は把握されているが、春の渡りについては十分解明されていない。
生態	採餌	名前のおとりハチ類の幼虫が餌で、クロスズメバチ（ジバチ）の巣を地中から足と嘴で掘り出す。
	繁殖	平地から低山の林で、夏鳥としては遅く渡来し、営巢地付近の上空で求愛飛行をよく行う。巣はほぼ毎年同じものを利用し、大きいものだ と直径が 2m 近くもある。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「決定版日本の野鳥 650」(平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸)

「新版日本の野鳥」(平成26年、叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄)

表 9.7.2-3(10/27) 重要な動物の予測結果 (ツミ)

項目		内容
名称		ツミ（タカ目タカ科）
選定基準		福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		小型のタカ類で、全長雄27cm、雌30cm。キジバトより小さい。雄成鳥は額からの体上面は暗青灰色で、腮以下の体下面は白く、淡い橙色で無斑のものと横斑があるものとがいる。雌成鳥は額からの体上面は暗石板色。
分布		福岡県内には夏鳥として渡来すると思われるが、生息状況はよくわかっていない。生息数は少ないと考えられる。嘉麻市、川崎町、添田町等で2000年以降繁殖期の記録がある。春秋の渡り時期には、県内各地で記録される。添田町では繁殖期にも観察されている。
生態	採餌	主に小鳥類を捕食する。
	繁殖	平地から山地の樹林地で繁殖するが、市街地の街路樹で繁殖することもある。マツやスギ等の横枝に巣を作る。1巣卵数は3～5個。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)
「決定版日本の野鳥 650」(平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸)

表 9.7.2-3(11/27) 重要な動物の予測結果 (ハイタカ)

[illegible]

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

表 9.7.2-3(12/27) 重要な動物の予測結果（オオタカ）

項目		内容
名称		オオタカ（タカ目タカ科）
選定基準		環境省 RL（NT）、福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		全長雄約 47cm～雌約 59cm。翼開張雄約 106cm～雌約 131cm。雄はハシボソガラス大。雌雄ほぼ同色。頭部から体上面は暗青灰色で、雄の方がより黒味が強く、雌は褐色がかかる傾向がある。
分布		福岡県内では 10 月、11 月、および 3 月に記録が多く冬鳥とされていたが、2004 年に宗像市で繁殖が確認された。また、県内各地で繁殖期の観察例が増えており、生息数は増加している。
生態	採餌	山地から平地の林に生息するが、農耕地や水辺等開けた場所に出て獲物を探すこともある。開けた所を飛ぶときは、羽ばたきに滑翔を交えて直線的に飛ぶ。鳥では、主にツグミ大の小鳥から大形のキジ類まで捕食する。ノウサギ、リス等の哺乳類も捕食する。
	繁殖	年に 1 回繁殖し、針葉樹、特にアカマツ等の大木の枝上に枯枝を積んで皿形の巣をつくる。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	
		工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。



（他地域参考写真）

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）

表 9.7.2-3(13/27) 重要な動物の予測結果 (サシバ)

項目		内容	
名称		サシバ（タカ目タカ科）	
選定基準		環境省 RL（VU）、福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態		全長雄約 47cm～雌約 51cm。翼開張 102.5cm～115cm。ハシボソガラスほどの大きさで、赤褐色のタカである。飛んでいる時、翼は細長く、翼端はとがって見える。	
分布		福岡県内には夏鳥として飛来し、全域の丘陵地や山地で繁殖する。春と秋には渡りの個体も多数通過するものと思われる。	
生態	採餌	低山の森林や周辺の開けた水田等で採餌する。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫類をはじめ、ネズミや小鳥類を捕食することもある。	
	繁殖	3月末から4月中旬にかけて東南アジア方面から渡ってきて繁殖する。繁殖期には急降下と急上昇を繰り返す波状飛行や、「キンミー」と鳴きながら帆翔する等のディスプレイが見られる。	
予測地域における確認状況		〃 〃 〃 〃 〃 〃	
予測結果	工事の実施（直接改変）	〃 〃 〃 〃 〃 〃	
		〃 工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。	

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」 (<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

表 9.7.2-3(14/27) 重要な動物の予測結果（ノスリ）

項目		内容
名称		ノスリ（タカ目タカ科）
選定基準		福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		全長雄約 50cm～雌約 60cm。翼開張 122cm～137cm。カラスと同大かやや大きい。雌雄ほぼ同色。頭頂から背以下の体上面は黒褐色で、淡褐色の羽縁や斑がある。
分布		福岡県内には冬鳥として渡来し、山間部や丘陵地で見られるが、個体数は多くない。干拓地や農耕地、湖沼、河川等の疎林から林にも生息する。春と秋には渡りの個体も通過する。北九州市平尾台では比較的個体数が多い。
生態	採餌	ネズミ類を中心に、鳥類、両生類、爬虫類等も捕食する。
	繁殖	平地から山地の河川敷の林、果樹園、農耕地、森林等で繁殖する。
予測地域における確認状況		 （他地域参考写真）
予測結果	工事の実施（直接改変）	 工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）
「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）

表 9.7.2-3(15/27) 重要な動物の予測結果（ハヤブサ）

項目		内容
名称		ハヤブサ（ハヤブサ目ハヤブサ科）
選定基準		種の保存法（国内）、環境省 RL（VU）、福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		全長雄約 38cm～雌約 51cm。翼開張雄 84cm～雌 120cm。ハシボソガラスよりもやや小さい。
分布		留鳥として北海道から九州の平野から山地の海岸、河口、河川、湖沼、農耕地等に生息する。福岡県内では留鳥として、曾根、響灘埋立地、今津ではほぼ 1 年中確認される。また頓田貯水池等では、冬季に少数の観察記録がある。毎年 4 月にヒヨドリの渡りに合わせるように、複数の個体が部埼に出現する。
生態	採餌	主に飛行している鳥類を足で蹴って仕留めたり、水面等に叩きつけて捕獲する。
	繁殖	海岸や山地の断崖や岸壁の岩棚や横穴等で繁殖する。近年、市街地のビルの窓辺や、鉄塔の鉄骨の横組の隙間等に営巣することもある。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	生態系の上位性の注目種として、影響予測を行った（「9. 生態系」の項を参照）。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）
「決定版日本の野鳥 650」（平成 26 年、真木広造・大西敏一・五百澤日丸）

表 9.7.2-3(16/27) 重要な動物の予測結果 (ニホンアカガエル)

項目		内容
名称		ニホンアカガエル（無尾目アカガエル科）
選定基準		福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		赤褐色のスマートなカエルで、体長 6cm 前後。背面は赤褐色、黄褐色、暗褐色で、眼の後縁から鼓膜をとおり前肢基部にかけて平行四辺形状の大きな黒斑がある。背面の左右に淡色の細い隆条がほぼ平行して走る。雄の腹面は白色、雌の腹面は橙色または橙色と黄色のまだら模様。
分布		福岡県内では、北九州市、福岡市、大牟田市、直方市、飯塚市、行橋市、宗像市、古賀市、福津市、宮若市、糸島市、那珂川町、荏田町、みやこ町等。県東部にはヤマアカガエルと共存している場所がある。通常、標高の低い山地、丘陵地が耕地と接する場所に産卵するが、主として産卵場所の悪化、消失により、個体数は減少している。最近では轍跡等の一時的な水溜りに産卵する例が多く、その場所は年ごとに変動し、極めて不安定である。また、一時的な水溜りでは乾燥死する卵塊や幼生がしばしばみられる。安定した産卵場所の多くは、人為的に造成されたビオトープや公園の池である。
生態	採餌	幼生は藻類や動物の死体などを食べる。成体や幼体は水辺から離れた林床や草地で生息し、比較的小さな昆虫やクモなどを捕食する。
	繁殖	森林内で生活し、早春に林縁部の溝や湿地に産卵する。卵塊は大型で、幼生は5月～6月に変態して上陸する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、移動経路の分断、生息環境の質的改変）	
		工事の実施による生息環境及び移動経路の分断に与える影響は軽微であると予測される。
		生息環境の質的改変による影響は軽微であると予測される。

出典:「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

表 9.7.2-3(17/27) 重要な動物の予測結果（オオキンブナ）

項目		内容
名称		オオキンブナ（コイ目コイ科）
選定基準		福岡県 RDB（DD）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		背びれ、尻びれの前縁には強い棘があり、その後縁には鋸歯がある。ギンブナと比べると体高が小さく、背びれの条数や鰓耙数が少ない。西日本を中心にみられる。東日本を中心にみられるキンブナが全長 15cm 程度と小型であるのに対し、本種は全長が約 30 cm で、これを超えるものも見られる。
分布		中部地方以西の本州、四国、九州に分布する。福岡県内では山国川、大根川、那珂川、筑後川、矢部川の各水系に分布する。県内にはオオキンブナと同定される 2 倍体の在来フナ類が自然分布することは確実と思われるが、詳細な形態学的・遺伝学的調査がなされておらず実態は不明。ただし、本種と同定される個体が採集されることはかなり少なく、減少している可能性が高い。
生態	採餌	生活場所は河川の中・下流域から池沼、湿地帯、農業用水路と幅広い。雑食性。
	繁殖	3 月～6 月に抽水植物帯で産卵する。
予測地域における確認状況		_____ _____ _____ _____
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	_____ _____ 直接改変による影響は無いと予測される。 _____ _____ _____ 生息環境の質的改変による影響は軽微であると予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「改訂版日本の淡水魚 山溪カラー名鑑」（谷口順彦 1989「オオキンブナ」、川那辺浩哉ほか（編）1989、株式会社山と溪谷社、pp. 342-343）

「増補改訂日本の淡水魚 山溪ハンディ図鑑 15」（藤田朝彦「オオキンブナ」、細谷和海（編）2019、株式会社山と溪谷社、pp. 56）

表 9.7.2-3(18/27) 重要な動物の予測結果（ミナミメダカ）

項目		内容
名称		ミナミメダカ（ダツ目メダカ科）
選定基準		環境省 RL（VU）、福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		体長は 3 cm 程度。体は細長く、口は上を向く。胸びれは高い位置にあり、背びれは後方についている。オスは背びれに切れ込みがあり、尻びれが大きく長方形になる。
分布		農業水路などの流れの緩やかで、水生植物が豊かな場所に生息する。浅い水域を好み、表層を群泳する。日本海側では京都府以西、太平洋側では岩手県以西の本州、四国、九州、琉球列島、隠岐や壱岐、対馬などの島嶼にも分布する。県内では全域に分布し、河川中下流域の植生が豊富なワンド環境やそれに連なる農業用水路、山間のため池などに生息する。特定外来生物カダヤシの侵入や、農業用水路の三面コンクリート化により個体数が減少している地域が多い。近年、メダカは分類学的に再検討が行われ、ミナミメダカとキタノメダカの 2 種に区別された。九州に自然分布するものはミナミメダカである。 
生態	採餌	雑食性で、動物プランクトンや植物プランクトンのほか小さな落下昆虫なども食う。
	繁殖	繁殖期は 4 月～8 月で、メスはしばらく腹に卵を付けたまま泳ぎ、その後水草などに産み付ける。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	
		直接改変による影響は無いと予測される。 生息環境の質的改変による影響は軽微であると予測される。

出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)

「レッドデータブック 2014<汽水・淡水魚類>」（細谷和海「メダカ南日本集団」、環境省（編）2015、株式会社ぎょうせい、pp. 296-297）

「増補改訂日本の淡水魚 山溪ハンディ図鑑 15」（川瀬成吾「ミナミメダカ」、細谷和海（編）2019、株式会社山と溪谷社、pp. 326-329）

表 9.7.2-3(19/27) 重要な動物の予測結果（ベニイトトンボ）

項目		内容
名称		ベニイトトンボ（トンボ目イトトンボ科）
選定基準		環境省 RL（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		腹長 30mm 前後の朱色のイトトンボ。
分布		国内では関東地方以西の本州、四国、九州に分布する。成虫は6月～10月に発生する。おもに平地から丘陵地の植生が豊富なため池に生息する。生息地の埋立て、水質汚濁、農薬汚染、外来種の影響などで減少している。一方、最近になって生息地の発見も相次いでおり、放虫など人為的な分布の可能性が示唆されている。
生態	採餌	幼虫は動物プランクトンや小さな水生昆虫類など、成虫はユスリカなどの微小な飛翔している昆虫類を餌としている。
	繁殖	樹木に囲まれた植生の豊富なため池で繁殖する。繁殖は6月から10月頃まで見られる。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	
		直接改変による影響は無いと予測される。
		生息環境の質的改変による影響は軽微であると予測される。



出典：「レッドデータブック 2014 日本の絶滅の恐れのある野生生物 昆虫類 5」（2015 年、環境省）

表 9.7.2-3(20/27) 重要な動物の予測結果（オオミノガ）

項目		内容
名称		オオミノガ（チョウ目ミノガ科）
選定基準		福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		成虫は雄が有翅、雌は無翅で“脱皮”後も蛹の殻の中に幼虫のような特殊な形態でとどまっている。
分布		国内では本州、四国、九州、沖縄に分布する。福岡県では山手にはあまり見られず市街地に分布する。そのため侵入昆虫として考えられている。市街地の街路樹の害虫としてその被害がしばしば問題になるような昆虫であったが、近年ヤドリバエの一種による寄生のため全国的にほぼ壊滅状態となった。
生態	採餌	孵化した幼虫はいわゆる「ミノムシ」として葉を食べ、極めて多食性である。しばしばプラタナスなどの街路樹の被害が報告されている。
	繁殖	各種樹木に産卵する。繁殖期は6月～8月頃である。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	
		工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）

表 9.7.2-3(21/27) 重要な動物の予測結果（マイマイカブリ）

項目		内容
名称		マイマイカブリ（コウチュウ目オサムシ科）
選定基準		福岡県 RDB（NT）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		体長 30mm～70mm 程のオサムシ科の甲虫。
分布		日本固有種で北海道、本州、四国、九州に広く分布し、各地で亜種化している。福岡県では、かつては平地～山地まで広く分布し、都市近郊の公園、里山、畑地等でも普通に見られた種である。都市化や餌生物の大型陸産貝類の減少で大きく個体数を減らしている。山地や河川において減少は少ない。
生態	採餌	成虫、幼虫ともに陸生貝類やミミズなどを餌とする。樹液や落下果実を食べることもある。
	繁殖	土中に産卵し林床で生育する。繁殖期は5月～7月頃である。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、移動経路の分断））	
		直接改変による影響は無いと予測される。
		移動経路に与える影響は軽微であると予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」（<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>）

表 9.7.2-3(22/27) 重要な動物の予測結果（ナガマルチビゲンゴロウ）

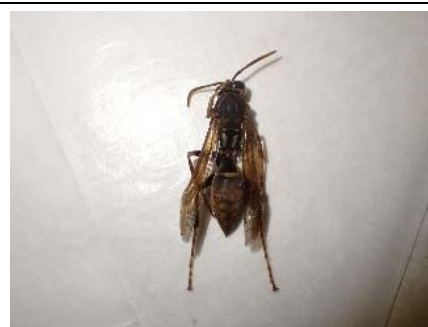
項目		内容
名称	ナガマルチビゲンゴロウ (コウチュウ目ゲンゴロウ科)	
選定基準	福岡県 RDB (EN)	
形態	体長約 1.5mm～1.8mm。背面は黄褐色で黒い斑紋がある。上翅は黄白色で、4 対～5 対の不規則な黒褐色の斑紋がある。会合部と基部も黒褐色。体型は細長い。	
分布	平地の止水域を好む。水生植物が一切ない、砂礫底のごく浅い環境でしばしば採集される一方、冬季に枯れた植物の間から多く得られた例もあり、好適な生息環境には不明な点が多い。近畿地方以西の本州、九州に分布する。福岡県内では朝倉市、北九州市に分布する。福岡県内の分布は極めて局地的であり、個体数も少ない。また、全国的にも少ない種類である。	
生態	採餌	微小な水生生物を餌としていると考えられる。
	繁殖	ため池の浅い環境で繁殖していると考えられるが詳細は不明である。近縁種は春から初夏に繁殖する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施 (直接改変、 生息環境の 質的改変)	
		直接改変による影響は無いと予測される。 生息環境の質的改変による影響は軽微であると予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)
「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」(中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp. 49)
「山陰地方産水生昆虫図鑑 I 甲虫類 (1)」(林、2015、ホシザキグリーン財団)

表 9.7.2-3(23/27) 重要な動物の予測結果（ヤマトアシナガバチ）

項目		内容
名称	ヤマトアシナガバチ（ハチ目スズメバチ科）	
選定基準	環境省 RL（DD）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態	体長は女王で 18 mm、働き蜂で 15mm～17 mm程度のアシナガバチ。	
分布	国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。平地から低山地に生息し、関東地方を中心に全国的に減少している。	
生態	採餌	チョウやガの幼虫などの小型の昆虫類。花粉や蜜も餌としている。
	繁殖	草本の葉裏や樹木の細枝、時には人家の軒下、壁にも営巣する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変）	工事の実施による生息環境への影響は無いと予測される。



出典：「レッドデータブック 2014 日本の絶滅の恐れのある野生生物 昆虫類 5」（2015 年、環境省）

「愛媛県レッドデータブック 愛媛県の絶滅のおそれのある野生動物」

(<https://www.pref.ehime.jp/reddatabook2014/top.html>)

表 9.7.2-3(24/27) 重要な動物の予測結果（ナガオカモノアラガイ）

項目		内容
名称	ナガオカモノアラガイ (マイマイ目オカモノアラガイ科)	
選定基準	環境省 RL (NT)、福岡県 RDB (VU)、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態	殻長 12 mm 程度。体層は高く、膨らみはオカモノアラガイよりも弱い。	
分布	北海道南西部から本州、四国、九州（福岡県、大分県、熊本県）に分布するが、九州では生息地が少ない。福岡県内では北九州市小倉南区竹馬川、遠賀川水系、飯塚市山口川、福岡市宇美川、那珂川町、大刀洗町本郷、みやま市大根川、筑後地方河川に分布する。産地が限定的で、個体数も少ない。近年の河川や湿地の開発・汚染により、生息地、個体数ともに減少している。福岡市宇美川、大刀洗町本郷は、高橋・岡本（1969）による記録で、現状は明らかでない。	
生態	採餌	水際の抽水植物上で暮らししており落葉など植物性のものを食べていると推測されるが、詳細は不明である。
	繁殖	静岡県で行われた研究では4月頃と8月頃に2回のピークがあり、卵は各卵が独立した状態でまとめて産み付けられた卵塊となって2週間ほどで孵化すると報告されている。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)
「静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史」（早瀬善正 2008、兵庫陸水生物（60）、pp151-157）

表 9.7.2-3(25/27) 重要な動物の予測結果（エサキアメンボ）

項目		内容
名称	エサキアメンボ（カメムシ目アメンボ科）	
選定基準	環境省 RL（NT）、福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）	
形態	体長 8mm～10 mm。背面は褐色で、体側部は銀白色に輝く。触角は長く体長の半分程度で、第 4 節が最も長い。体型は細長く、両側は並行に近い。	
分布	北海道、本州、四国、九州、対馬に分布するほか、朝鮮半島、中国にも分布する。福岡県内では上毛町、豊前市、北九州市若松区、小倉南区、福津市、古賀市、福岡市中央区、福岡市西区、久留米市、大牟田市に分布する。福岡市周辺では都市化、有明海周辺では水路改修により生息適地が消滅しており、生息地・生息数は減少傾向にあると考えられる。	
生態	採餌	水面で生活し、水面上に落ちた小動物を捕食する。
	繁殖	和歌山県での調査では、成虫で陸上越冬した後に春先から繁殖を開始し、年 2～3 化であることが報告されている。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	
		直接改変による影響は無いと予測される。 生息環境の質的改変による影響は軽微であると予測される。



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)
「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」（中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp. 276）

表 9.7. 2-3(26/27) 重要な動物の予測結果（オオミズムシ）

項目		内容
名称		オオミズムシ（カメムシ目ミズムシ科）
選定基準		環境省 RL（NT）、福岡県 RDB（VU）、福岡市配慮指針（掲載種）
形態		体長約 11 mm。背面は黄褐色で、眼間は黄色味が強い。前胸背に 10 本～11 本の黒色横帯、上翅に細かい黒色斑紋がある。近縁種とは体サイズや雄前脚の形状等で区別が可能。
分布		近畿地方以西の本州、四国、九州に分布するほか、朝鮮半島、中国、ロシア極東部にも分布する。福岡県内では上毛町、北九州市、宗像市、福津市、福岡市、糸島市に分布する。近年になって県東部から日本海側の各地でいくつかの生息地が発見されたが、生息地は良好な環境のため池に限られることから、引き続き注意する必要がある。
生態	採餌	泥底表面の微小な藻類を食べると考えられている。
	繁殖	福岡県では早春と盛夏の 2 回産卵することが観察されている。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	



出典：「福岡県の希少野生生物レッドデータブック福岡」(<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>)
「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」（中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp. 241）

表 9.7.2-3 (27/27) 重要な動物の予測結果（スジヒラタガムシ）

項目		内容
名称		スジヒラタガムシ（コウチュウ目ガムシ科）
選定基準		環境省 RL（NT）
形態		体長 3.8mm～4.5mm。背面は赤褐色。眼間～吻端は黒色。前胸背と上翅の中央はやや暗色。上翅には10条の点刻列がある。中胸腹板は後方にこぶ状の隆起がある。体型はやや丸い楕円形。
分布		本州、四国、九州に分布するほか、朝鮮半島にも分布する。
生態	採餌	本種を含むガムシ科の成虫の食性はほとんど明らかでないが、おおそ草食、腐食性もしくは雑食であると考えられる。
	繁殖	止水域に生息し、水質が良好で植物が豊富な湿地を好む。メスは腹端に卵のうを付着させ、孵化まで保持したまま活動する。
予測地域における確認状況		
予測結果	工事の実施（直接改変、生息環境の質的改変）	



出典：「ネイチャーガイド日本の水生昆虫」（中島ほか 2020、株式会社文一出版、pp. 172）

7.3 評価

1) 評価の手法

(1) 環境影響の回避又は低減に係る評価

調査及び予測の結果を踏まえ、対象事業の工事の実施に伴って発生する動物への影響が実行可能な範囲で最大限に回避され、又は低減されているものであるか否かについて評価する。

(2) 環境の保全の観点からの基準又は目標との整合性に係る評価

動物に関する基準又は目標として、表 9.7.3-1 に示す「福岡市環境配慮指針（改定版）」における環境配慮事項と予測結果等を比較することにより、環境の保全に関する施策との整合が図られているか否かについて評価する。

表 9.7.3-1 福岡市環境配慮指針における環境配慮事項

区分		環境配慮事項	
地域特性 別環境 配慮事項	内陸部 (市街住 宅地域)	生物多様性の確保及び自然環境の体系的保全	周辺緑地や水辺環境との連続性を考慮した緑地整備・管理を行い、生物の生息空間の創出、生態系ネットワークの形成に配慮する。
事業特性 別環境配 慮事項	ごみ焼却 施設整備 事業	生物が生息・生育する場所や条件への影響軽減	生物の生息・生育地周辺に緩衝緑地帯を設置し、騒音・振動、粉じん、排ガスによる影響を軽減する。
			計画地内の自然環境を保全する地域を予め設定する。
			工事用道路の本数や延長・幅員、作業場、資材置き場、土石採取場、土石捨て場の造成面積を極力少なくする。
		動物の移動経路の確保、行動習性に配慮した付帯施設の設置	立入防止フェンス・ネットなど、動物の行動習性に配慮した侵入防止施設を設置する。
			這い出し口の付いた側溝や集水桝など、小動物の行動習性に配慮した付帯施設を設置する。
		生物の生息・生育環境に連続性を持たせる	在来種による緑化を進め、周辺の緑地とのネットワーク化を図ることによって、生物の生息・生育環境に連続性を持たせるよう努める。
		貴重・希少生物の保存	貴重・希少生物への影響の可能性が考えられる場合は、専門家の意見を参考に影響の低減措置(代替地の創造や移植)を講ずる。
		外来種の侵入・拡散防止	緑化樹種を選定する際には「生態系被害防止外来種リスト」などを確認の上選定する。

2) 環境保全措置

事業者の実行可能な範囲で環境影響をできる限り回避又は低減を図ることを目的として、以下の環境保全措置を検討した。

(1) 検討した環境保全措置

動物の環境保全措置を検討するにあたっては、事業特性や地域特性を踏まえ、環境保全措置として表 9.7.3-2 に示す措置を検討した。

表 9.7.3-2 環境保全措置の検討状況

影響の要因	環境保全措置の内容	実施の適否	適否の理由
建設工事の実施	地形改変の影響低減	適	地形改変の影響低減を図ることにより、動物に与える影響（生息環境の質の低下）を低減できるため。
	濁水対策	適	濁水対策を図ることにより、動物に与える影響（生息環境の悪化）を低減できるため。
	汚水対策	適	汚水対策を図ることにより、動物に与える影響（生息環境の悪化）を低減できるため。
	動物の重要種への影響軽減	適	動物の重要種への影響軽減を図ることにより、生態系に与える影響を軽減できるため。
	土地利用の制限	適	土地利用の制限を図ることにより、動物に与える影響（生息環境の質の低下）を低減できるため。
	緑化整備	適	緑化整備を図ることにより、動物に与える影響（生息環境の質の低下）を低減できるため。

(2) 環境保全措置の内容

環境保全措置として、表 9.7.3-3 に示す措置を実施する。

表 9.7.3-3 環境保全措置の内容（工事の実施による影響）

環境保全措置		実施主体	効果	効果の不確実性	他の環境への影響	措置の区分		
						予測条件として設定	低減に係る保全措置	その他の保全措置
の地形影響低減	切土・盛土の土工量を極力少なくする。	事業者	地形改変の低減による生息環境の保護。	小さい	廃棄物等		○	
濁水対策	降雨時に発生する濁水は沈砂池等で滞留させ、自然沈降後の上澄み水を放流するものとし、浮遊物質量（SS）200mg/L以下として放流する。	事業者	濁水対策による生息環境の保全。	小さい	水質、生態系	○	○	
	沈砂池の堆砂は、定期的に除去して、沈砂池の機能を確保する。						○	
	造成範囲外の雨水等が沈砂池等に流入することがないように、側溝や土嚢などを設置して、造成範囲内の雨水と分離する。						○	
	工事工程、内容により著しく濁った濁水の発生が予測される場合など、必要に応じて濁水処理プラントの設置を検討する。						○	
	沈砂池等を可能な限り大規模のものとし、水質の項における予測条件で設定した降雨強度以上の場合であっても対応できるよう配慮する。						○	
汚水対策	解体撤去工事において発生するダイオキシン類等の洗浄汚水は放流しない。洗浄水は循環使用し、洗浄終了後産廃処理する。	事業者	汚水対策による生息環境の保全。	小さい	水質、生態系		○	
動物の影響の軽減	工事区域の周囲にはフェンスを張り、 中大型哺乳類が敷地内に侵入することを防ぐとともに、資材等運搬車両や施設関連車両は速度等の交通規則を遵守する。	事業者	動物の重要種への影響を軽減することができる。	小さい	騒音、振動		○	
土地利用の制限	変更区域以外の範囲での土地利用や不必要な草刈、隣接する山林の林縁部に生育する樹木の伐採等の環境改変を行わないよう、現場作業員に徹底する。	事業者	土地利用の制限による生息環境の保護。	小さい	植物、生態系		○	
緑化整備	工事後、施設周辺の樹木・植え込みには、現状と同程度の植栽を行う。	事業者	緑化整備による植物の生育・生息環境の保全。	小さい	植物、生態系		○	
	緑化にあたっては、地域遺伝子の保全のために出来るだけ県内産の在来種を植栽するように努める。						○	

3) 事後調査

採用した予測手法は、その予測精度に係る知見が十分蓄積されていると判断でき、予測の不確実性は小さい。また、環境保全措置についても効果に係る知見が十分に蓄積されていると判断でき、効果の不確実性は小さい。よって、事後調査は実施しないものとした。

4) 評価の結果

動物の重要な種の予測の結果の総括は、表 9.7.3-4 に示すとおりである。

事業の実施により生息環境に軽微な影響を及ぼす可能性がある（影響の程度 B）と予測された種は、ニホンザル、キツネ、アオバト、コシアカツバメ、コサメビタキ、ニホンアカガエル、オオキンブナ、ミナミメダカ、ベニイトトンボ、マイマイカブリ、ナガマルチビゲンゴロウ、エサキアメンボ、オオミズムシ、スジヒラタガムシの 14 種である。よって、これら合計 14 種を主な保全対象とする。

表 9.7.3-4 動物の重要な種に対する予測の結果

分類群	種名	影響の程度	影響要因	保全対象
		工事の実施		
ほ乳類	ニホンザル	B	直接改変、移動経路の分断	○
	キツネ	B	直接改変、移動経路の分断	○
鳥類 (一般鳥類)	ヤマドリ	C		-
	アオバト	B	直接改変	○
	コシアカツバメ	B	直接改変	○
	コサメビタキ	B	直接改変	○
	キビタキ	C		-
鳥類 (猛禽類)	ミサゴ	C		-
	ハチクマ	C		-
	ツミ	C		-
	ハイタカ	C		-
	オオタカ	C		-
	サシバ	C		-
	ノスリ	C		-
	ハヤブサ	「生態系」の項で予測		
両生類	ニホンアカガエル	B	直接改変、移動経路の分断	○
魚類	オオキンブナ	B	生息環境の質的改変	○
	ミナミメダカ	B	生息環境の質的改変	○
昆虫類	ベニイトトンボ	B	生息環境の質的改変	○
	オオミノガ	C		-
	マイマイカブリ	B	移動経路の分断	○
	ナガマルチビゲンゴロウ	B	生息環境の質的改変	○
	ヤマトアシナガバチ	C		-
	ナガオカモノアラガイ	C		-
底生動物	エサキアメンボ	B	生息環境の質的改変	○
	オオミズムシ	B	生息環境の質的改変	○
	スジヒラタガムシ	B	生息環境の質的改変	○

注：1) 予測結果の区分は以下のとおりとした。

A：影響要因が生息・生育に影響を及ぼす可能性がある。

B：影響要因が生息・生育に及ぼす影響は軽微である。

C：影響要因が生息・生育に及ぼす影響はない。

2) 影響要因の区分の詳細は以下のとおりとした。

工事の実施：建設工事の実施、資材等運搬車両の走行

3) 保全対象については以下のとおりとした。

○：保全措置を実施するもの。

-：保全措置を実施しないもの。

(1) 工事の実施による影響

① 環境影響の回避又は低減に係る評価

本事業は、地域に生息する動物の保全の観点より、既存のごみ焼却施設の敷地内に新たな施設を建設することで、地形や自然環境の改変量を極力抑える計画としている。また、濁水対策、動物の重要種に対する影響低減及び土地利用の制限等の環境保全措置を講じる。

濁水対策として降雨時に発生する濁水は沈砂池等で滞留させ、自然沈降後の上澄み水を放流するものとし、浮遊物質量（SS）200mg/L 以下として放流する。また、沈砂池の堆砂は、定期的に除去して、沈砂池の機能を確保する。さらに、造成範囲外の雨水等が沈砂池等に流入することがないように、側溝や土嚢などを設置して、造成範囲内の雨水と分離する。工事工程や内容により著しく濁った濁水の発生が予測される場合など、必要に応じて濁水処理プラントの設置を検討する。

解体撤去工事において発生するダイオキシン類等の洗浄汚水は放流しない。また、洗浄水は循環使用し、洗浄終了後産廃処理することとする。

工事を実施している区域の周囲にはフェンスを張り、中大型哺乳類が敷地内に侵入することを防ぎ、資材等運搬車両や施設関連車両は速度等の交通規則を遵守する。

その他、改変区域以外の範囲での土地利用や不必要な草刈、隣接する山林の林縁部に生育する樹木の伐採等の環境改変を行わないよう、現場作業員に徹底する。

計画施設周辺の樹木・植え込みには、現状と同程度の植栽を行うことにより、及びそれらの餌動物の生息環境を創出するとともに、移動経路を早期に復元する。緑化にあたっては、地域遺伝子の保全のために出来るだけ県内産の在来種を植栽するように努める。

したがって、環境への影響は事業者の実行可能な範囲内で、回避又は低減が図られているものと評価する。

② 環境の保全の観点からの基準又は目標との整合性に係る評価

予測の結果、環境保全措置を講じることで、周辺緑化や水辺環境との連続性を考慮した緑地整備・管理を行い、生物の生息・生育空間の創出、生態系ネットワークの形成に配慮することにより、動物への影響は影響がない又は軽微であると予測される。

したがって、「福岡市環境影響指針（改定版）」における「環境配慮事項」を満足することから、環境保全に係る基準又は目標との整合が図れているものと評価する。